HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代ロシア文章語（散文）形成期の諸作家における造語体系について : ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの場合
Author(s)	浦井, 康男
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 121, 左21-左87
Issue Date	2007-02-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/18909
Type	bulletin (article)
File Information	CulturalScience121-21.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 121 （2007）

近代ロシア文章語（散文）形成期の諸作家における造語体系について
── ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの場合 ──

浦　井　康　男

§1　序論

筆者は近代ロシア文章語形成期に生じた，語彙的・文体的変化の研究を進めているが，ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの代表的な作品に対して[1]，見出し語でまとめたコンコーダンス，即ち lemmatized concordance を作成し，それらの作品中の使用語彙に対して，後の検証が可能な形での語彙統計をすでに発表している。[2]

研究のその先の方向としては，これらの語彙統計のデータをコンピューター上で重ね合わせて比較検討することにある。そしてその中で，三者で重なった語彙の部分は後に近代ロシア文章語の中核的な語彙に，重ならない部分は各々の作家に固有の語彙である可能性が高いので，各部分の語彙の特徴を，頻度，現代ロシア語との関連，造語形式などの様々な観点から詳細に分析していく。

---

[1] なぜこの三人を選んだのかについては，詳しい背景的な説明が必要だが，本論ではそこまで立ち入らない。ただラヂシチェフの作品は，それまでのスラヴ・ロシア文体の代表的な例として，カラムジンの作品は，この時期に始まった新しいロシア文章語（散文）の第一歩を示す言語実践として，プーシキンの諸作品は，ロシア文章語に安定度が増した時期の，散文文学での言語実践として捉えている。

[2] lemmatized concordance: Urai (1997), Urai (1998), Urai (2000), Urai (2002)

これらの作業によって，これまでは印象批評でしか言えなかった，三人の作家の語彙的特徴が，具体的なデータに基づいて明らかになり，最終的には，言語の近代化とはどんな現象か，近代ロシア文章語を確立したのは誰なのかという根本的な問題に，実証的に迫れるのではないかと期待している。

なお語彙統計の比較に際しては，形式的な意義を持つ機能語（代名詞，接続詞，間投詞，前置詞，小詞など）と，語彙的な意義を持つ内容語（名詞，形容詞，動詞）[3] とでは，その扱いが大きく異なる点に留意する必要がある。前者の機能語では，先の論文でも示したように[4]，個々の語の頻度の推移を観察すれば，概ねその語の使われ方の変遷が分かる。

しかし後者の語彙的意義を持つ名詞や形容詞では，個々の語の出現は作品のテーマに大きく依存するため，単純に頻度の比較をしても意味をなさないことが多い。例えばある作家で〝12 月〞の語の使用は多いが，〝3 月〞の語の使用はゼロであった場合，作品のテーマ性との関連では，この事は意味があるかもしれない。しかし語彙体系の中では，これらは 1 月から 12 月までが 1 組の語彙群に属し，それらの使用に偏りがあっても，語彙体系の観点からは特に意味を持たない。

これら語彙的意義を持つ語に対しては，個々の語の単なる頻度の比較ではなく，ロシア語で十分に発達した造語法に着目し，その派生の傾向性（動詞→動名詞，行為者名詞；形容詞→指小・表愛形，最上級形，抽象名詞；名詞→指小・表愛形，形容詞，動詞など）に着目して分析する。これによって語彙的意義に直接触れずに，これら三人の作家の使用語彙体系の相違と語彙拡充の方法を，形式的に評価できるのではないかと考える。そこで本論では語彙的意義を持つ名詞，形容詞，動詞について，造語法の観点から分析を行う。

この作業は，17〜19 世紀初めのロシアの大きな社会変化に伴って，「ロシア

---

[3] 副詞には，очень のような形式的な意義の語から быстро のような語彙的意義を持つものまで幅があり，形態解析の基礎となったザリズニャクの文法辞書 Зализняк（1977-2003）でも副詞の扱いは一定していないので，本論では扱わない。

[4] 浦井康男（2003）

語が大量の新語で満たされたが，その圧倒的な部分は借用語ではなく，ロシア語の造語手段によって形成された新語であった」[5] という言及にも対応しよう。

§2　品詞分布と分析手続き

本論での分析の出発点として，上記コンコーダンスから得られた語彙統計から[6]，人物などを示す固有名詞を除く名詞，形容詞，動詞についてこれらの使用頻度を取り出し，ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの諸作品における三つの品詞の割合を見てみよう。なお以下では，ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンを各々，Radi，Kara，Push と省略する。また記述のスペースが無い所では，単に R，K，P，または，r，k，p と記載することもある。

	Radi	Kara	Push[7]	計
A（形容詞）	4,126 個(15%)	13,063(18)	4,490(14)	21,679
N（名詞）	13,589 個(50%)	34,317(49)	14,655(44)	62,561
V（動詞）	9,563 個(35%)	23,679(33)	13,800(42)	47,042
計	27,278 個	71,059	32,945	131,282

これら実測値を百分率で見てみると，ラヂシチェフとカラムジンで名詞が全体の約 50%を占めるのに対してプーシキンではその比が 44%，カラムジンで形容詞が 18%であるのに対して，プーシキンでは 14%，プーシキンで動詞が 42%であるのに対して，カラムジンでは 33%となる。ここから，ラヂシチェフでは名詞の比率が高く，カラムジンでは名詞と形容詞の比率が高いが，プーシキンではカラムジンと丁度逆に，動詞の比率が高いことが分かる。しかし

[5] Мальцева (1975), стр. 3

[6] 参考文献に記したコンコーダンスの Appendix（Vocabulary Statistics）には，品詞毎の語彙統計が示されている。

[7] プーシキンでの数値は，コンコーダンス：Urai（1997）と Urai（2002）の語彙統計を合せたもの。

百分率では，例えばラヂシチェフとプーシキンの形容詞の差１％が，どの位の意味を持つかは，はっきりしない。

そこでラヂシチェフでの形容詞，名詞，動詞の総計(27,278)，カラムジンでの総計 (71,059)，プーシキンでの総計 (32,945) を，三者を合せた形容詞，名詞，動詞の総計 (131,282) で割り，全使用語彙に対する各作家の使用語彙の割合を求めると：

ラヂシチェフ：27,278÷131,282＝0.20778……＝Rr
カラムジン　：71,059÷131,282＝0.54127……＝Kr
プーシキン　：32,945÷131,282＝0.25094……＝Pr
計　1.00

ここで形容詞，名詞，動詞の使用において，三者で差がないと仮定すると，ラヂシチェフで予想される形容詞の使用量（いわゆる期待値）は，形容詞の全使用数 21,679 にラヂシチェフのデータの割合 (Rr≒0.21) を掛けたものとなる。同様に，カラムジン，プーシキンでも計算すると，

ラヂシチェフでの形容詞の予想量：21,679×Rr＝ 4,504
ラヂシチェフでの名詞の予想量　：62,561×Rr＝12,999
カラムジンでの形容詞の予想量　：21,679×Kr＝11,734　等

三者での形容詞，名詞，動詞の期待値は：

	Radi	Kara	Push
A（形容詞）	4,504	11,734	5,440
N（名詞）	12,999	33,862	15,700
V（動詞）	9,775	25,462	11,805

この期待値は，三者で形容詞，名詞，動詞の使用に個人差がないと仮定して得られたものであり，この節の始めに示した実際の値（実測値）からこの期待値を引いた差を比べることで，三者での形容詞，名詞，動詞の使用の偏りが明らかになる。

実測値－期待値	Radi	Kara	Push
A	－378	1,329	－950
N	590	455	－1,045
V	－211	－1,783	1,995

この表でも，百分率で指摘した傾向が確認できるが，基礎となる期待値の大きさが各々異なるため（例えば形容詞では，ラヂシチェフが 4,504 に対してカラムジンは倍以上の 11,734 等），この値を直接比較することには無理がある。そこで三者でのデータ量の違いを修正し，実測値と期待値の差を客観的に評価する手段として，「調整された残差」と呼ばれる Haberman 法がある。[8] 次の式で上記の表の値を処理すると下記の表の値になる。[9]

$$残差＝\frac{(実測値－期待値)／SQRT(期待値)}{SQRT((1－行合計／総合計)＊(1－列合計／総合計))}$$

	Radi	Kara	Push
A	－6.934441229	19.82205879	－16.29253163
N	8.035412084	5.04151184	－13.31371647
V	－2.99998154	－20.60007045	26.48323487

ここで残差の絶対値が 3.29 より大きいと，生起確立は 0.001 以下即ち，自然な状態でこのようなことが生じるのは 1000 回に 1 回以下となり 0.1％レベルで有意と判断される。また残差が正の値を取っていると，実測値は期待値よりも有意に多く，負の値を取っていると，期待値よりも有意に少ないことも分かる。

この表から読めるのは：

[8] エヴェリット (1980) p.49-50，齊藤 (2005) p.104　残差が 2.58 以上だと生起確立は 0.01 以下となり 1％レベルで有意，残差が 3.29 以上だと 0.1％レベルで有意と判断される。

[9] 以下の式で SQRT は平方根（√）を示す。

・カラムジンでは，形容詞が極端に，また名詞もかなり多いが，その反対に動詞は極端に少ない。
・プーシキンでは，動詞が極端に多く，その反対に形容詞と名詞が，相当に少ない。
・ラヂシチェフでは名詞が多く，形容詞が少ないが，その差は他の二人ほど極端ではない。

名詞，形容詞，動詞のこのような差異は，彼らの語彙構造，さらには統語構造の違いを雄弁に物語っていると思われるが，以下では造語法による派生関係を軸に，これらの品詞の出現を具体的に分析し，それらの結論をもとに最後の 13 節で統語構造を検討しよう。

分析作業の始めに，コンコーダンスの語彙統計から得られた三者の語彙リストを，一つに合わせてアルファベット順に並べ，各々の作家でのその語彙の頻度を記録する（Radi，Kara，Push）。このデータにさらに，品詞（HI），ザリズニャクの文法辞書（Zal）[10] に記載されているか（1 は記載有り， 0 は記載無しを示す），その語のプーシキン辞典[11] での頻度（Pd），現代ロシア語頻度辞書[12] での頻度（Fd）のデータを追記する。

この表は三者の語彙をコンピューター上で重ね合わせ，そこに補助的情報を付加したものであり，今後この表を語彙比較集計表と呼ぶことにするが，以下にその一部を示す。なお語彙（LEX）の語末の数字（同形異義識別番号）は， 3 節以下では省略した。

---

[10] Зализняк（1977-2003），但し電子データとして使ったのは，1977 年と 1987 年の版まで。

[11] Сл. Пушк.を直接電子データ化するのは困難なので，この辞書の見出し語だけを取り出し，語末からの逆順に配列した Bartoszewicz（1985）を光学的文字認識（OCR）でデータ化して使っている。なおこのデータで示された頻度は，Новые материалы к словарю А. С. Пушкина（1982）によって追加された値を加えたものである。

[12] Засорина（1977）

例　語彙比較集計表

HI	LEX　（RLEX[13]）	Radi	Kara	Push	Zal	Pd	Fd
A	великий1	58	229	23	1	388	692
N	великодушие1	1	4	3	1	19	2
AD	великодушно1	0	0	4	0	21	6
A	великодушный1	0	8	2	1	7	3
N	великолепие1	1	23	0	1	1	10
A	великолепнейший1	3	3	0	1	0	0
AD	великолепно1	0	9	0	0	0	20
A	великолепный1	12	59	5	1	30	59
A	великороссийский1	1	0	0	1	0	0
N	великость1	2	2	0	0	0	0
N	величавость1	1	1	0	1	1	2
A	величавый1	0	1	3	1	46	7
A	величайший1	4	18	1	1	19	0
N	величание1	1	0	0	1	0	0
V	величать1	3	1	1	1	9	4
A	величественный1	3	48	0	1	8	31
N	величество1	6	5	2	1	168	11
N	величие1	9	12	2	1	20	39
N	величина1	1	4	1	1	1	71
N	вельможа1	3	2	2	1	51	1
N	венец1	8	13	1	1	98	8

次にこの語彙比較集計表と派生語辞典[14] を使い，同一語幹からの派生関係

[13] 例示した集計表には示していないが，実際にはこのデータをエクセルで運用し，見出し語（LEX）の列の隣に，VB のマクロを使って，見出し語のアルファベットを語末から逆順に並べた列（RLEX）も作成している。

[14] 主にТихонов (1985) に依ったが，他にЕфремова (2000)，Worth (1970) 等も参照した。

にある一群の語を以下のように１枚のカードにまとめて記入する。

великий →	величайший	
	величавый	→ величавость
	великость	
	величие	
	величество	→ величественный
	величина	
	величать	→ величание
	возвеличить	→ возвеличивать
	увеличить	→（преувеличить）→ преувеличенный

なおラヂシチェフとカラムジンに対しては，lemmatized concordance は作成していないが重要な作品群があるので，それらに対しては語形（word form）でまとめたコンコーダンスを作成している。[15] 上記の比較集計表で頻度ゼロの語彙については，これらのコンコーダンスを参照して，たまたまラヂシチェフの「旅」やカラムジンの「手紙」で使われなかっただけなのか，それとも他の作品でも使われていないのかを，チェックしている。一方プーシキンに関しては，プーシキン辞典の頻度でこれを判断している。[16]

---

[15] Радищев に関しては，Радищев（1952）より Житие Федора Васильевича Ушакова, О человеке, о его смертности и бессмертии を，Карамзин に関しては Карамзин 2 (1984)より Бедная Лиза / Остров Боригольм / Сиерра－Морена / Моя исповедь, *Письмо к издателю журнала* / Марфа－посадница, или Покорение Новагорода, *Историческая повесть* / Рыцарь нашего времени / Чувствительный и холодный. *Два характера* の７つのテキストを OCR で電子データ化し，OCP（Oxford Concordance Program）でコンコーダンスを編纂し，プリンターで打ち出した。

[16] プーシキン辞典の頻度には散文と韻文の区別がないが，音声形態や語義や用例から見て散文でも使うと思われるもので頻度約 15 より多いものは，必要に応じてプーシキンでも「使う」と判断した。

ここで留意すべきことは，本論で取り上げた造語手段はすべて，本来ロシア語にそなわったものであり，一部の生産性を失ったものを除けば，必要に応じていつでも使用することができるが，その使用は作家に任されているという点である。そのため特定の語で頻度がゼロであっても，それはたまたまその語を使う場面が無かったのか，作家の好み（趣味）でその接辞による造語を避けたのかは，即断できないものも多い。しかし多数の例を集め，作家毎の傾向性を探ることで，それがあるパターンの中の偶然の穴なのか，必然の穴なのかを推察できるものもかなりあると考える。

以下の 3 節から 5 節では，比較的単純な派生関係を示す 1,392 組のカードを対象に，それらの派生で使われている接尾・接頭辞を集計し，各作家での派生に際して使用する接辞の傾向性を探ることにする。またその先の節では語彙比較集計表を，見出し語のアルファベットを語末から逆順に並び換えた RLEX の列でソートして，該当する接尾辞等をそろえて抽出する作業も行う。これは派生元語幹との語彙的関連を捨て，同一接尾辞に焦点を当て語生成の問題を形式的に扱うことを意味している。

§3　名詞を派生元とするもの

名詞を派生元とするもので，ある程度数量があり，比較的単純な派生形式のためパターン化できるものは全部で 559 組あった。それらのパターンと具体的な例を示すと，以下のようになる。なお／は平行した派生を，…は同じものが複数あることを示し，またN→N/（A→V）での括弧は，NからNとAが派生され，そのAからVが二次的に派生していることを示している。

N→N，N→A，N→V，
N→N/A，N→N/V，N→A/V，
N→N/N…，N→N/N…/A，N→N/N…/V，
N→N→N，
N→N/（A→V）

N→A/A…，N→A/A…/N…，N→A/A…/V
N→V→N，N→V→A，N→N/A/V

二つ以上の派生の例を示すと：
N→N/N…：трость → тростник/тросточка
нога → ножка/подножка/подножие[17]
N→N/N…/A：
деревня → деревенька/деревенщина/деревушка/деревенский
N→N/N…/V：вдова → вдовушка/вдовица/овдоветь
N→N→N：лес → лесок → лесочек，труба → трубка → трубочка
N→N/(A→V)：долг → должник/(должный → долженствовать)
N→A/A…：лазурь → лазурный/лазоревый,
смерть →(смертный → бессмертный)/смертельный
N→A/A…/N…：ус → усатый/усастый/усики
человек →(человечный → бес～)/человеческий/человечество/
человечик
N→A/A…/V：имя → именной/именитый/именовать
N→V→N：черта → чертить → чертеж
шепот → шептать → шептание
N→V→A：соль → солить → соленый
краска → красить → крашеный
N→N/A/V：пир → пирушка, пиршество/пирный/пировать

これらの派生の中で，使用頻度の高い接辞を作家毎に集計すると，以下のようになった。なお本論では，各々の語の実際の使用頻度ではなく，様々な語幹にどの位これらの接辞が使用されているかを問題とするので，１例でも100例でも，その接辞が使用されていれば１回と数えている。換言すれば，特

[17] Тихонов (1985) では，これら３語を同じレベルの派生語として扱っている。

に断らない限り本論での数値は，異なり見出し語の数を示している。

N→N

	指小辞（ик ок ка ко）	ство	ец	（ик－ица）
R	23	14	8	10
K	49	16	13	22
P	67	5	6	10
3 [18]	16	7	3	3

N→A

	ный	вый	ский－ический[19]	истый	（по－，не－，бес－）
R	41	6	12	4	13
K	89	19	19	9	18
P	49	14	11	3	4
3	46	4	8	0	0

N→V

	ать ить еть	овать
R	17	8
K	27	9
P	25	6
3	16	3

§4　形容詞を派生元とするもの

形容詞を派生元とし，比較的単純な派生形式でパターン化できるものは，

[18] 3はラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの三者で，共に使われていることを示す。
[19] 借用語幹に付くский－ическиｊは，別に§6で扱っている。

総数 230 組あった。名詞と同様に，二つ以上の派生の例をあげると以下のようになる。

A→N，A→A，A→V，

A→N/N，A→N/A，A→N/V，A→A/V，

A→N/N/A，A→N/N…/V

A→N/A/A，A→A/A/V

A→N→A，A→N→V，A→A→N，A→V→N

A→N/A/V

派生例：

A→N/N：щедрый → щедрость/щедрота

толстый → толща/толщина

A→N/V：редкий → редкость/редеть，синий → синева/синеться

A→N/N/A：остроумный → остроумие/остроумец/остроумнейший

глупый → глупец/глупость/глуповатый

A→N/N…/V：гордый → гордость/гордец/гордыня/гордиться

A→N/A/A：трудный → трудность/трудноватый/трудненький

A→A/A/V：красный → красненький/красноватый/краснеть

A→N→A：сладкий → сладость → сладостный

A→N→V：блаженный → блаженство → блаженствовать

A→A→N：путный → беспутный → беспутство

A→V→N：меньший → уменьшить → уменьшение

A→N/A/V：скорый → скорость/скорейший/ускорить

тихий → тишина/тихонький/утишать

これらの派生の中で，使用頻度の高い接辞を作家毎に集計すると，以下のようになった。

A→A

	ейший (айший)	енький	оватый	не－	бес－[20]
R	48	3	1	3	1
K	65	5	4	1	0
P	12	7	3	2	2
3	5	1	0	1	1

A→N

	ость	ство	ие	ец	ик	ота
R	42	7	7	3	2	9
K	44	9	11	8	3	4
P	14	6	5	4	2	0
3	22	6	9	0	1	0

A→V

	ать ить еть	овать	接頭辞（о－, у－, с－）
R	12	4	6
K	22	2	5
P	12	1	5
3	6	2	5

§5　動詞を派生元とするもの

動詞を派生元とし,比較的単純な派生形式のためパターン化できるものは,総数603組あった。なお動詞から動詞の派生だけのものは，完了・不完了体の派生が主で，本論のテーマと外れることが多いので，派生された動詞が二

[20] 接頭辞 наи－は，ейший と共に使われているため，ここではカウントしなかった。詳しくは§9参照。

次的な派生元になるような場合を除いて，以下では直接扱わない。ただ主な基幹動詞の接頭辞による派生については，プーシキンに焦点をあてた 11 節で扱うことにする。

V→N，V→A，
V→N/N，V→N/A
V→N/N…
V→N/N…/A，
V→N/A/A
V→N→A，V→A→N，V→N→N
V→N/(A→N)，V→A/(N→A)

派生例：
V→N/N：принять → принятие/прием，петь → пение/певец
V→N/A：чаять → чаяние/чаятельный
V→N/N…：скакать → скачка/скачок/скакун
V→N/N…/A：знать → знание/знаток/знатный
рачить → рачение/рачитель/рачительный
V→N/A/A：
восхитить → восхищение/восхищенный/восхитительный
V→N→A：скучать → скука → скучный
плакать → плач → плачевный
V→A→N：зреть → зрелый → зрелость
запасать → запасный → запас
V→N→N：мотать → мот → мотовство
уважить → уважение → неуважение
V→N/(A→N)：
стремиться → стремление/(стремительный → стремительность)
V→A/(N→A)：суетиться → суетливый/(суета → суетный)

これらの派生の中で，高頻度の接辞を作家毎に集計すると，以下のようになる。

V→N

	ние	ゼロ語尾	ство	тель	ец	ник	ка	щик(чик)
R	184	19	7	55	11	8	8	7
K	102	61	4	39	10	11	13	10
P	57	34	6	11	6	12	15	11
3	107	37	3	8	1	3	6	2

V→A

	ный	енный	тельный	接頭辞(не－，бес－等)
R	10	14	18	5
K	15	10	20	2
P	15	10	9	3
3	12	7	6	3

§6　借用語

借用語に関しては，当然のことながら，西欧の人物・事物を紹介したカラムジンの作品での使用が圧倒的に多い。しかしこの数値を前節までのデータに加えると，データの整合性が失われる恐れがあるので，ここで別に扱う事にした。主に名詞を派生元とし，派生関係にある借用語群のカード数は全部で 181 枚あった。これらを作家毎に集計すると，ラヂシチェフでは 33，カラムジンでは 173，プーシキンでは 43，三人共通で 8 組となり，カラムジンでの派生数が圧倒的であることが分かる。

これらのいくつかを例示すると，以下のようになる。なお r はラヂシチェフ，k はカラムジン，p はプーシキンを示し，(r，k) はラヂシチェフとカラムジンで，(3)は 3 人の作家で使用されていることを示す。

N→N/A：

министр(3)→ министерство/министерский（派生は k のみ）

аристократ → аристократизм/аристократический（全て k のみ）

N→N…/A：

химия（r，k）→ химик/химист/химический（派生は k のみ）

N→N→A：аптека → аптекарь → аптекарский（k のみ）[21]

N→A→N：оригинал → оригинальный → оригинальность（k のみ）

N→A/V：бальзам → бальзамический/бальзамировать（k のみ）

церемония → церемониальный/церемониться（p のみ）

N→N/V：актер → актриса/актерствовать（k のみ）

N→N/A…/V：

философия(3)→ философ(k)/философский(3), философический(r, k)/философствовать（k）

高頻度の接辞を作家毎に集計すると，以下のようになる。

N→N

	ство	指小(ка)	(ик ица)	ист	изм	ゼロ語尾
R	1	0	2	2	1	0
K	9	1	11	12	4	10
P	1	2	1	2	0	0
3	0	0	1	0	0	0

N→A

	ный	ский	ический	вый	物主形容詞
R	8	7	4	1	1
K	38	25	37	5	4
P	15	13	2	1	0
3	0	0	1	1	0

[21] 以下「k のみ」は，「全て k のみ」の意義で使う。

N→V

	овать[22]	(ать ить еть)
R	0	0
K	8	3
P	2	2
3	0	0

名詞から名詞への派生の中で ист，изм，ゼロ語尾は借用語が持つ外来の接尾辞であるが，ство，ка，ик，ица の付いた語は，借用語幹にロシア語の接尾辞が付き，ロシア語化されたものと見なすことが出来る。カラムジンでは単に借用語の数が多いだけでなく，この点からも多くの名詞が，ロシア語化されて派生されている。例えばイタリア語では опера（歌劇）から оперетта（軽歌劇，小歌劇）への派生があるが，カラムジンでは оперетта は使われず，ロシア語の指小辞が付いた形の оперетка が使われている。

名詞から形容詞の派生では，借用語幹にどうしてもロシア語形容詞の接尾辞が必要となるが，これを担うのは主に ский と ический である。この語尾による派生もカラムジンが圧倒的に多い。カラムジンでは，ヘラクレス（Геркулес）に由来する геркулесовский と共に，盗賊と間違えられ村人に包囲された旅人が，村人達を脅す場面で，言葉遊びの要素の強い гераклитствовать（怪力を見せつける）という語まで作られ，外国語をロシア語体系に組み込む際の敷居の低さが見て取れよう。

人種・国名・地名を示す語（Афин, Берн, Берлин, Грек, Калмык, Париж, Россия, Швед 等，全部で 38 組）からの派生でも，カラムジンの場合が圧倒的に多い。また国名・地名からその住人を示す場合，共通スラヴ語期からあっ

[22] команда（r，k，p）－командовать（k，p）－скомандовать（p）の興味深い例もある。また－ировать はラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンで各々 0，7，1 となっている。

た анин の活性が落ち，18 世紀後半からロシア語起源の ец が増大してくると言われているが[23]，下記のデータでも，ラヂシチェフでは анин が大部分であるのに対し，カラムジンでは ец の数が一番多く，また接尾辞の種類も多彩であることが分かる。

	N→N				N→A	
	ец	ка	анин	анка	кий	ский
R	0	0	5	0	0	8
K	13	6	7	3	1	25
P	2	3	2	0	2	7
3	1	0	0	0	2	4

§7　派生の傾向性

以上の 4 節で示した主要な接辞とその頻度から，次の様な派生の傾向性を指摘することが出来る。

N→Nでは，指小辞の使用が顕著で，その使用はP＞K＞Rの順になる（PはRの 3 倍）。

行為者等を示す（ец，ик，ица）は，Kが多い。

集合・抽象名詞を形成する ство は，RとKが多い。

N→Aで，形容詞への派生はKが一番多く，借用語に対する派生も考慮すると圧倒的多数となる。

形容詞に主観的評価を与える，истый，оватый もKが多い。

接頭辞による派生は，RとKで多い

N→Vでは，それほど顕著な差はないが，Rに比べて，KとPが多いと言える。

[23] Очерки-Измен. (1964), стр. 19, 67。またロモノーソフは ец は外国語をロシア語に翻訳する機能を持つと言っている。

A→Aでは，比較・最上級を形成する ейший，айший はRとKで圧倒的に多い。

形容詞に主観的評価を与える，енький，оватый はKとPに多い。

A→Nでは，形容詞から抽象名詞を作る ость がRとKで圧倒的に多い。

主に性質形容詞から作られ，その性質を持つ人を示す ец，ик はKに多い。

A→Vでは，それほど顕著な差はないが，Kが多いと言える。

V→Nで一番顕著なのは，ние による動名詞の派生で，Rが突出している。

Kはその半分，Pはさらにその半分となる（4：2：1）。

行為者名詞を作る тель も，上記と同様の傾向を示している。

ゼロ語尾による派生ではKが一番多く，次はPでRは一番少ない。

V→Aでは，тельный が ние，тель と同じ傾向を示している。

以上の結果を作家毎に分けてみると：

RとKで共通：形容詞最上級形，形容詞派生の抽象名詞，行為者名詞等

KとPで共通：名詞指小辞，主観的評価の形容詞，形容詞指小辞，動名詞ゼロ語尾等

RとPで共通：特に無し

Rで顕著：動名詞

Kで顕著：名詞派生の形容詞（借用語の場合を含む），名詞派生の ец，ик，ица

これらを文体的観点から見てみると，ラヂシチェフの特徴は文語的性格のものが多く，一方プーシキンでは，口語的性格のものが多い。カラムジンの特徴は両者にまたがり，ちょうど中間的位置を占めている。またラヂシチェフとプーシキンの間には共通項がないのも特徴的である。

§8　行為者名詞と動名詞

借用語の派生はカラムジンに特徴的であったが，動詞を派生元とする動名詞（nomina actionis），行為者名詞（nomina agentis），さらに形容詞の派生も（V→N/N/A），特定の作家に特徴的なものである。そこでこの造語形式に焦点を当て，このような派生関係を含む 94 組（パターン化が難しく 5 節では扱わなかったカードも，ここには含まれる）を取り出して，作家毎に集計してみると以下のようになった。

V→	N（動名詞）		／	N（行為者名詞）		／	A（形容詞）
	ние	ゼロ語尾	／	тель	（ец ица ик）	／	тельный[24]
R	51	0		49	12		13
K	23	4		35	13		13
P	13	0		11	6		4
3	28	5		8	3		3

上記の数値は，動詞を派生元とする造語を検討した 5 節で示した値（ние については，R，K，P で 4：2：1，тель については R≒K で，4：4：1）と，ほぼ同じ傾向を示していることが分かる。ここで一つの動詞から，動名詞と行為者名詞が共に派生されている場合を，作家毎に集計すると，R，K，P，3 人共通で，54 組：26 組：8 組：5 組となって，この造語形式はラヂシチェフで一番体系的に使われていることが分かる。

まず，三者に共通した派生語が多い例を以下に示す。なお動詞には ся 動詞も含まれるが，ここでは ся の無い形で代表させている。

[24] тельный は§9 で検討する。

утешить (3)→ утешение (3)
утеха (r, k)
утешитель (r, k)
утешительный (3)
велеть (3)→ веление (r)
повелеть (3)→ повеление (3)
повелитель (r, k) → повелительница (r)
повелительный (k)
мучить (3)→ мучение (3)
мука (3)
мученик (3) → мученица (p)
мученический (p)
мучитель (r)→ мучительство (r)
мучительский (r)
мучительный (3)

3 節から 5 節で行ったようなパターン化が難しい，これら上記の複雑な派生関係については，それらを適切に記述する方法がなかなか見つからないが，派生の全体像を定性的に示す用語として，「派生の幅」と「派生の深さ」と言う表現を，以下で使うことにする。例えば上例の утешить と мучить は，様々な接尾辞によって派生元の語から同時に多くの派生語が生じているので，「派生の幅が広い」と言い，велеть では派生された語がまた派生元となって次の派生語が生成されていくので「派生の深さが深い」と言う。一方逆の場合は，「派生の幅が狭い」，「派生の深さが浅い」と表現する。

以下に動名詞と行為者名詞を含む，派生が深い例をあげるが，このような例では，派生の一番深いレベルでの造語は，ラヂシチェフの場合が圧倒的に多く，次にカラムジンが続き，プーシキンではほとんど無く，あっても三者に共通(3)の場合か，浅い派生の場合が多い。

просветить (r, k) → просвещение (3)
просветитель (k)
просвещенный (3) → просвещеннейший (r, k)
прорицать (r) → прорицание (r)
пророк (k) → пророческий (p)
(пророчить)[25] → пророчество (r, k) →
пророчествововать (r)
основать (3) → основание (r, k)
основатель (r, k)
основательный (3) → неосновательный (r, p) →
неосновательность (r)

ラヂシチェフのこのような造語形式を，どう評価したらよいかを考える際に有効な手法は，2節で述べたように，語彙比較集計表の見出し語（LEX）の文字を語末から逆順に並べた列（RLEX）でソートして，語末が тель，ние で終わる名詞を抽出することである。[26] さらにそれらが，現代ロシア語の約十万語を登録している，ザリズニャクの文法辞書の見出し語にあるかをチェックし，これらと現代ロシア語との関連を探っていく。

語末が тель の語彙は，比較集計表の検索では全部で 126 語あったが，これを作家毎の語彙数，文法辞書の見出し語にあるか（あれば Zal＝1，無ければ Zal＝0）で調査すると以下のようになる。

тель	全部で	Zal＝1 のもの	Zal＝0 のもの
R	84	63	21
K	66	57	9
P	32	32	0

[25] пророчить の括弧は，比較統計表には登録されていないが，二次的派生元として派生語辞典に登録されている場合に使う。

[26] тель で終わるものの中，мятель постель приятель неприятель добродетель отель はノイズなので除く。

同様に ние で終わる語彙を比較集計表で検索すると，全部で 712 語あり，これらを上記と同じ方法で数えると，以下のようになる。[27]

ние	全部で	Zal＝1	Zal＝0
R	516	426	90
K	363	343	20
P	290	282	8

新語 (neologism) はすべて，新たに造語されたものであるが，新たに造語されたものがすべて新語になるわけではない。新しい対象や概念を表現するために作られ，一般的に使用されるようになった新語(neologism)と並んで，特定の文脈で一度だけ作られ，一般的な使用を目的としない新語（hapax legomenon，機会語，臨時語[28]）も数多くある。[29] 前者は言語史的には，誰が創り出し初出は何時だったかが問題となるが[30]，後者ではこのような問題は生じない。

現在のところ 18 世紀末の語彙体系の，信頼できる標準的なデータが存在しないので，現代ロシア語に登録されていない語 (Zal＝0) が，本当に当時の語彙目録に入っていなかったかの判断はできない。そのため断定的なことは言えないが，Zal＝0 の тель と ние のかなりのものは，機会語に属するものと考えられる。

それではなぜラヂシチェフでこの「機会語」の造語が多いのであろうか。「言語の近代化」と呼ばれる過程では一見，造語体系が整備され，体系的な派

[27] имение 等は除く。

[28] occasional word，nonce word，詳しくは Лопатин (1973), стр. 63 以下参照。

[29] Мальцева (1975), стр. 6 では，さらに両者の中間に位置する「潜在的な語彙」も設定している。

[30] 例えばカラムジンが作ったとされる промышленность など。Карамзин 1 (1984) стр. 86 の原注で，この語は彼が最初に使ったことが言及されている。しかしカラムジンが作ったと考えられてきた多くの語は，Hüttl-Worth (1956) 等の研究で，それ以前にすでに使われていたことも明らかになっている。

生が行われるようになるのではないかと考えられる。確かに「～する人」，「～すること」を示す тель と ние の接尾辞の意義は明確で，間違えることはない。しかし共通スラヴ語期にまで遡り[31]，古代スラヴ語でも生産的であった，これらの接尾辞による造語は，日本人にとっては「漢語」に近い性格のものであり，тель はちょうど「～家・者・屋など」に対応するものではなかろうか。これらの語では意義は明確で誤解されることはないが，逆に造語が機械的なため，ロシア語起源の ик，ец，щик 等の多彩な接尾辞による語彙に比べて，語の印象が低いと思われる。

この節では以下で，18 世紀末から 19 世紀始めにかけて一番生産性が高く，その意義も比較的単純で明確な接尾辞 тель による行為者名詞を考察するが[32]，この接尾辞による行為者名詞を，Очерки-Измен. (1964) ではその動詞性の程度に従って，以下の 3 群に分類している。[33]

1)：動詞性が一番弱く，具体的で安定した意義を持つもの(職業，社会的地位，行為への能力や傾向：учитель, писатель, мечтатель 等)

2)：第一群より動詞的で，説明語と結合しなければ文の中に現れないもの(настоятель монастыря, последователь идеи, покоритель Сибири 等)

3)：一番動詞的性格を持ち，正規の動詞の支配に従って，説明語を支配するもの（снискатель древности, усладитель жизни, возобновитель империи 等)。

第一群と第二群の語彙は，安定して伝統的な辞書の一部となっているのに対して，第三群は必要に応じて作られ，そこからこれらの語の動詞的意義も理解される。18 世紀末から 19 世紀始めの時期では，第三群に属する名詞は，

---

[31] Meillet (1965), p. 349

[32] この接尾辞による派生語が，対象的意義（道具，装置）を持つのは，19 世紀後半からであった。Очерки-Измен. (1964), стр. 36

[33] Очерки-Измен. (1964), стр. 26～28，Суффиксальное (1974), стр. 15～18。なお後者では，第三群に対して，形動詞に近いものという記述はあるが，「機会語」という規定はしていない。

かなり広く使われ，後代より自由に生成されたとされる。同書ではこれらの記述の後に，機会語の用例が続くが，その中にはラヂシチェフとカラムジンの作品からの語もいくつか含まれ，例えばラヂシチェフでは обновитель, успокоитель, извещатель, лелеятель, обогатитель，カラムジンでは раздаватель, разбиратель, изъяснитель 等があげられている。

そこで本論ではデータベースを運用して，тель にかかる不一致定語（主に生格）の有無を調査してみた。作業としては lemmatized concordance を作成するために作った，各作家の作品データベースから[34]，見出し語フィールド（LEX）が тель で終わる名詞を抽出し，合わせて作品中でその語が使われている個所を示す絶対番地（REF）から，左右の文脈データ（LKWIC，RKWIC）を取り出す。そしてこれらの情報を KWIC 形式にまとめてプリンターで打ち出し，不一致定語の有無を調査することになる。以下にラヂシチェフでのデータの一部を示す。

028_16　хотя на мизинце царей! *властитель* мира, если, читая сон мой, ты
068_06　другому не подвластен. *властитель* первый в обществе есть закон;

тель で終わるが行為者名詞ではない語彙をこのデータから除いて，тель にかかる不一致定語の有無を調べた結果，以下のようになった。ここで不一致定語のないものは，上記の第一群に対応すると考えられる。なお比較語彙表で調査した前述の数値は，異なり見出し語の数であったが，下記では全出現数を数えているため，両者の数値は異なっている。

	全体	不一致定語を持つもの	%
R	219	64	29
K	337	57	17
P	152(99)	7	5(7)

[34] データベースの構造については，浦井康男（1996），pp. 93～107 を参照。

プーシキンでは，不一致定語を持つものはごく少数で（любитель отечественной словесности, преобразователь России 等），しかも тель の 152 例中 53 例が，ベールキン物語での「駅長」（станционный）смотритель であり，この語は行為者名詞というより，特定の人物を示すために使われた名詞と考えられる。そこでこの偏りを除いて再計算すると，不一致定語を持つものは 99 例中 7 例となり，７％となる。

これに対してラヂシチェフとカラムジンで不一致定語を持つものは 29%，17%となり，その数はかなり増える。カラムジンでは，зритель сего спектакля，любитель（музыки／мудрости／живописи／натуры／оперы／театра／книг／наук），обожатель（красоты／дубового леса／Англичан），почитатель философа，утешитель несчастных 等があり，これらは上記第二群に対応しよう。

なおカラムジンでは以下に示す отвечатель の用例があるが，ここでは，営業を終え閉じた宿屋の扉の向こうで「眠そうに答えた者」に対して，夜警が難儀している旅人の身分を保証した状況が，状態を示す形容詞を伴った сонливый отвечатель で，巧みに表現されている。

Ночной караульщик … подошедши к запертым дверям трактира, уверял сонливого отвечателя, что Monsieur est un voyageur de qualité;

（Лозана, 147_34）[35]

Очерки－Измен.（1964）もこの箇所を取り上げて，使用の特異性を指摘しているが，そこではこの отвечатель を第三群の機会語に入れ[36]，意義的に能動形動詞の отвечающий，отвечавший に近いものとしている。[37]

ラヂシチェフでも第二群に属する，властитель（мира／правила／народов），зритель позорища，любитель человечества，нарушитель（общия

[35] 147_34 等の数字は，コンコーダンス底本の 147 ページ 34 行を示す。

[36] Zal の値だけでなく，Pd，Fd の値もゼロ。

[37] Очерки-Измен.（1964），стр. 28

тишины／общественной доверенности)，служитель(божества／пьяницы)，утешитель скорбей，учредитель（плавания／веселий／веселостей／инквизиции)等の不一致定語による目的語の表示の例がかなりあるが，それと共に以下のような極めて動詞性の高い例もあり，これらでは，表現の圧縮がなされていると思われる。

・複文のシンタクスが圧縮されたもの：

свидетель расстания у отца с детьми (Крестьцы, 45_39)

свидетель страшного волнения страстей (Крестьцы, 51_04)[38]

・所有代名詞が不一致定語の事実上の主語を示すもの：

исполнитель твоих велений (Спасская полесть, 24_16)

усладитель наших бедствий (Любани, 11_41)

・「～しない人」という否定構文に対応するもの：

непризнаватель бытия божия (Торжок, 81_22)

・行為者名詞に動詞性が残り，生格ではなく前置詞句を伴うもの：

попечитель о благе общем (Вышний волочок, 76_28)

рачитель в исполнениях (Крестьцы, 47_21)

この節の始めでプーシキンでは，一つの動詞から動名詞と行為者名詞が共に派生されている場合は 3 人共を含めて 13 組だけであり，この造語法はあまり使われていないことを述べたが，以下の例でもこのことは明らかである。なおここでは派生全体を示すため，動詞派生だけの場合も示している。

будить (3)→возбудить (3)　→ возбуждать (3)
возбуждение (r)
(возбудитель)→ возбудительница (r)
побудить (r，p)→ побуждать (r)
побуждение (r，k)

[38] 厳密には свидетель の派生元の動詞（ведать）は，現代ロシア語には存在せず，свидетель が派生元となって，動詞 свидетельствовать が派生される。

побудитель (r)
пробудить (3) → пробуждать (3)
пробуждение (r, k)
разбудить (3)

будить からの派生	3 者共	R	K	P
V	5	2	0	1
N	0	5	2	0

上記の派生関係ではV→Vに関しては，プーシキンでも他の 2 者とほぼ同等の派生が認められるが（3 者共のVが 5 語），V→Nとなる тель と ние の派生名詞は，ラヂシチェフとカラムジンでしか認められない。

これに対して同じく行為者名詞を作る接尾辞で，ロシア語起源の щик（чик）については，тель と ние のような派生関係を示す，まとまった資料が少ないので，語彙比較集計表から щик（чик）の接尾辞を持つものを抽出し，さらに動詞派生のものだけを選んだ。[39] その結果は，R，K，P，3 人共で，10：13：16：2 で，Z＝0 はなかった。数が少なくて確定的なことは言えないが，同じ行為者名詞を作る接尾辞でもロシア語起源のものは，プーシキンが一番多く，この領域ではプーシキンもラヂシチェフとカラムジンに匹敵していることが分かる。

[39] 語彙リストを示す：бунтовщик, доносчик/щик, допросчик, заговорщик, зачинщик, извозчик/щик, купчик, лазутчик, наборщик, носильщик, обманщик, осмотрщик, ответчик, отдатчик, откупщик, перебежчик, переводчик, перевозчик/щик, переплетчик, повозчик, подрядчик, покупщик, приказчик, разносчик/щик, ростовщик, танцовщик

§9　形容詞からの派生

前節では動詞派生の動名詞と行為者名詞を検討し，この生成形式が，ラヂシチェフに特徴的なものであることを指摘したが，性質形容詞を派生元とする類似の生成形式（A→N/N：性質とその性質を持つ人）も少数だが，以下のように見られる。

A→	N（性質）			／	N（その性質を持つ人）			
	ость	ство	ие	／	ец	ник	тель	чак
R	2	0	1		2	1	0	0
K	6	1	2		7	2	1	0
P	3	0	1		1	0	0	1
3	3	0	1		1	1	0	0

例：храбрый (3)　→ храбрость (3)　／ храбрец (k)
　　остроумны (3)　→ остроумие (3)　／ остроумец (k)
　　хищный (r，k)　→ хищность (r，k)　／ хищник (r，k)
　　смелый (3)　→ смелость (k，p)　／ смельчак (p)

なお一つの形容詞から，上記のタイプの二つの名詞が共に派生されている全部で 13 組の場合を，作家毎に集計すると，R，K，P で 1：12：2 となって，この造語形式は主にカラムジンで使われていることが分かる。なおプーシキンでは ец, ик 以外に，不規則な造語で最高度の性質を示すとされる接尾辞 чак（смельчак）も使われている。[40]

比較・最上級を作る ейший（айший）は，7 節から分かるようにラヂシチェフとカラムジンで非常に多く使われているが，この接尾辞と，関連する наи〜

[40] Ефремова (1996), стр. 493

ейший，самый＋～ейший および пре＋原級形について，次に検討する。まず語彙比較集計表から，ейший(айший)の語尾のものと，品詞が形容詞で(HI＝A)，語頭が пре のものを抽出する。なお後者には夾雑物がかなり含まれるので，これらは削除する。[41]

ейший (айший) は語彙比較集計表では，見出し語数で 106 個，使用総数で 353 個，現代ロシア語辞書に登録なし (Z＝0) は見出し語数で 31 個あったが，作家毎の内訳は以下のようである。

ейший	見出語数	使用数	Z＝0
R	53	106	14
K	70	220	16
P	18	27	3

これに対して絶対最上級の意義 (この上なく～) を示す пре＋原級形は，見出し語数で 17 個，使用総数で 48 個，Z＝0 は 8 個であった。[42] 作家毎の内訳は，

пре＋原級形	見出語数	使用数	Z＝0
R	4	5	0
K	13	36	5
P	7	7	4

наи～ейший はラヂシチェフにしかなく，見出し語数で 11 個，使用総数で 17 個，また全て Z＝0 であった。[43]

---

[41] 夾雑物としては превратный, предвечный, преступный 等があげられる。なお прекрасный, прелестный も，接頭辞を含めて全体として語彙化していると考え除いた。

[42] пре＋原級形：престарелый, престранный, преувеличенный, предлинный, премудрый, пребольшой, презрительный, пребогатый, прескверный, превеликий, пренесчастный, прехолодный, прехрабрый, превысокий, пресильный, преважный, престрогий

[43] наи～ейший：наивеличайший, наидействительнейший, наидревнейший, наижесто-

以上のことから ейший(айший) は，見出し語の数ではカラムジンが一番多く（70），次にラヂシチェフが続くが（53），使用頻度ではカラムジンがほぼ倍である（220 対 106）。しかしこの語形から派生される古風な最上級 наи～ейший は，ラヂシチェフにしかない。一方カラムジンでは，最上級として самый＋～ейший の形が 29 個含まれていた。[44] 二人とは対照的に，プーシキンでは ейший による派生は少なかった。

一方 пре＋原級形もカラムジンが一番多いが，プーシキンも比較的多く，しかもこの場合，Z＝0 で現代ロシア語に繋がらない語彙も珍しく多い。これらのことをまとめると，文体的には以下の図式が考えられよう。

ラヂシチェフとカラムジンでは共に形容詞を派生元とする ейший による造語が盛んだが，「最上級」に関しては，両者で наи～ейший と самый＋～ейший が相補分布をなしている。しかしこの両形は，プーシキンでは使われず，現代語にも引き継がれなかった。他方，пре＋原級形による「絶対最上級」は，主にカラムジンとプーシキンで使われていたが，これらの中には現代語まで引き継がれなかったものもある。

	R	K	P	現代
ейший(айший)	53	70	18	古い
наи～ейший	11	0	0	使われず
самый＋～ейший	0	29	0	使われず
пре＋原級(Z＝0 の数)	4(0)	13(5)	7(4)	古い

18 世紀末から 19 世紀初めにかけて，形容詞から抽象的特徴を示す名詞を作る手段として，これまでの接尾辞 ота，изна，ство 等を押さえ，ость による派生が確立したと言われる。[45] このことは，4 節で示したA→Nの派生で，

чайший, наикраснейший, наилестнейший, наинужнейший, наиполезнейший, наистрожайший, наитвердейший, наияростнейший

[44] самый＋～ейший は，行為者名詞の場合と同様の KWIC データを作成して，チェックした。なおここには самый лучший は含まれない。

[45] Очерки-Измен. (1964), стр. 19, 111

ость の派生が他を圧倒して，一番多いことでも分かるが，特にラヂシチェフとカラムジンで多い（R：K：P＝42：44：14）。さらにこの接尾辞を，派生関係のカードを離れて，語彙比較集計表でその数を調べると，以下のようになる。[46]

	ость	Z＝0
R	214	23
K	210	10
P	154	0

この表からこの派生は，一見ラヂシチェフとカラムジンで差がないように見えるが，個々の語の使用例を調べてみると，そこに大きな違いがあることが分かる。それはこの ость による「抽象名詞」が複数形で使われると，「対象的」意義を獲得することである。[47]

そこでこれらの名詞について，形式的に調査しやすい複数斜格（生格，与格，造格，前置格）で使われている用例をデータベースから抽出して，集計すると，ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの三者で 7，46，9 個となり，カラムジンにおける ость の名詞の口語的使用がはっきり現れた。[48] 一方現代ロシア語との繋がりという点からは，ラヂシチェフでは派生形は多いが，機会語としてのその場限りの一回だけの造語が多いと推定できる（Z＝0 が 23 個）。

8 節の動名詞と行為者名詞の分析で тельный を保留にしたが，その理由

[46] гость，трость，кость，волость，крепость2（要塞）等のノイズを除く。

[47] Очерки-Измен.（1964），стр. 109。また Мальцева（1966）は現代語では ство で表現される具体的な意義が，18 世紀の言語では ость の名詞で示されていることが多いとして，ラヂシチェフ，カラムジンの例をあげているが（стр. 271），それらは全て複数形であった。

[48] Очерки-Измен.（1964），стр. 110。厳密には，19 世紀中葉～後半でこの形は，民衆性や口語性の色付けの文体的な目的で使われたと言われている。

は，この接尾辞は起源的には行為者名詞の тель に形容詞接尾辞 н が付加されて出来たものだが，18 世紀末には，тельн(ый) 自体が独立した語形成フォルマントとして機能し，動詞語幹から直接形容詞を派生するようになって，意義的にも性質性が高まり，行為者名詞との関連がなくなったからである。さらにこの接尾辞は動詞語幹だけでなく，動詞派生の抽象名詞にも付くようになった（чувствие → чувствительный，　впечатление → впечатлительный 等)。[49]

その結果この形容詞は，非常に多義的なものとなり[50]，形式的な扱いだけではなかなか意義の違いまで探れないが，語彙比較集計表でこの接尾辞を持つ形容詞を抽出し，ノイズの部分を削除すると，R，K，P でそれぞれ 70：70：50 となった。

これと関連して動詞や動詞派生の名詞を派生元とし，性質，能力，傾向性等を示す形容詞 е(и)мый, ливый, чивый の頻度を調べ，これらをまとめると以下のようになった。なおカッコ内の数字は Z＝0 の数である。

	тельный	е(и)мый	ливый	чивый	計
R	70(10)	30(4)	23(3)	7(2)	130(19)
K	70(5)	25(2)	23(2)	4(0)	122(10)
P	50(1)	17(1)	20(1)	9(1)	96(4)

ここから読めるのは，動詞や動詞派生の名詞を派生元とするタイプの形容詞は，三者でそれほど差がなく，プーシキンでもかなり使われていることが分かる。これについては，Виноградов が，Томашевский の Гавриилиада の言語分析について言及し[51]，プーシキンではエピテットにも動詞的要素が優勢で，ливый 以外にも，тельный や動詞派生の様々な形容詞（主に被動形動詞）が数多く使われていると指摘したことにも対応していよう。一方現代ロ

[49] Очерки-Измен. (1964), p 401
[50] Ефремова (1996), стр. 458
[51] Виноградов (1938 [1982]), стр. 273

シア語との繋がりの有無(Z=1)という点からは，プーシキンが一番強く(Z=0は4個)，ラヂシチェフでは機会語としての造語が多い（Z=0が19個）と考えられる。

一方形容詞を派生元として，形容詞に主観的評価を与え，性質の不十分さを意味するo(e)ватый，指小を意味するенький，名詞や動詞を派生元とし傾向性を意味するистый，目立つ特徴を示すастый等の口語的要素は，上記の場合とは異なり，カラムジンとプーシキンで多い。[52]

	o(e)ватый	енький	истый	астый	計
R	2	3	5	0	10
K	9	7	15	0	31
P	3	14	2	2	21

最後に派生関係を離れて，形容詞使用の量的な問題を見てみよう。2節から形容詞の使用は，カラムジンで一番多いことが分かるが，データベースを使って一文中に含まれる形容詞長語尾の数を調べると，以下のようになった。[53]

---

[52] 以下で語彙リストを示すが，оватый では副詞も入れた。なお маленький,виноватый, невиноватый は，主観的評価の意義を持たないと考え，このリストから排除した。

глуповатый, грубоватый, желтоватый, замысловатый, красноватый, ноздреватый, продолговатый, рябоватый, шароховатый, щеголеватый, трудновато, тесновато

беленький, кисленький, коротенький, красненький, миленький, молоденький, низенький, новенький, новёшенький, пригоженький, серенький, старенький, тоненький, узенький, хорошенький, худенький, чистенький,

ветьвистый, волнистый, жилистый, извивистый, излучистый, казистый, кремнистый, мшистый, осанистый, отрывистый, пенистый, порывистый, пушистый, развесистый, размашистый, сенистый, слоистый, струистый, тенистый, тернистый, утесистый

пузастый, усастый

[53] 文の厳密な定義は極めて難しいので，ここではピリオド，感嘆符，疑問符によって区切

一文中の形容詞の数

	形容詞を含む文の総数	形容詞１個の文	２～５個	６個以上
R	1840	55%	44%	1%
K	5167	46	50	4
P	1203	54	44	2

このデータから，ラヂシチェフとプーシキンでは１文中に含まれる形容詞の数が１個である文が，全体の過半数（55%と54%）を占め，両者は比較的類似しているのに対して，カラムジンでは２個以上の形容詞を含む文が過半数を占め(54%)，明確な差が認められる。またプーシキンでは１文中に11個以上の形容詞を含む文は無いが，カラムジンでは１文中に11個から26個までの形容詞を含む文が，ほぼ連続的に分布している。

形容詞11個を含む文：	6	16	1
12	2	18	1
13	3	20～21	1
14	4	22	2
15	2	24～26	1

カラムジン「ロシア人旅行者の手紙」の中で，形容詞が多用されている箇所を例示すると：

Я взошел на крыльцо, и увидел молодую, прекрасную, нежную, белокурую женщину, — в маленькой черной шляпке, в Амазонском зеленом платье, с белым платком в руках, — вышедшую из коляски с пожилым, горбатым, долгоносым мущиною ...(За две мили от Дрездена, 50_16)

られて，大文字で始まるものを一応の文区切りとした。また定語として使われた形容詞に特徴があると考えたので，述語としてしか使われない短語尾はカウントしていない。

Вообразите себе человека довольно высокого, тонкого, долголицого, рябоватого, белокурого, почти безволосого ... (Июля 21, 74_04)

このように形容詞を積み重ねた表現は,一見精密な描写のように思えるが,性質形容詞は本来抽象的な概念を示しているため，それによる表現は形容詞をいくら積み重ねても，静的な印象を与え，生き生きとした実体には迫れないことが多い。確かにカラムジンの文章は読みやすいが，どこか静的な印象を与えるのは，このような点に原因があるのではないだろうか。[54]

形容詞派生を検討したこの節で明らかになったことを，作家毎にまとめると：

カラムジン：形容詞の使用量が多く，派生に関しても新･旧語尾（口語的，文語的）で生産的である。

ラヂシチェフ：派生は主に文語的語尾で多く生産されているが，派生された語は現代語に継承されなかったものが，かなり含まれる。

プーシキン：派生は口語的語尾で多く生産されているが，形容詞とその派生語の使用量は少ない。

§10　名詞からの派生

名詞に関する派生を検討する際に厄介なのは，接尾辞の多義性と派生の複雑さである。例えば名詞派生によく使われる ец は，名詞，形容詞，動詞に付加され，特定のグループに属する人間や，性質や行為で特徴づけられる人間を示す（армеец，горец，глупец，гонец）と共に，動詞に付加され道具を示

[54] 浦井康男（1976）で示したように，普通名詞は対象の概念を伝える（概念性）と共に，具体的な対象も想起させる(対象性)。普通名詞の対象性が，描写に鮮烈な印象を与える例として，例えばチェーホフの作品で，殺人現場に残された血塗れのゆでた馬鈴薯の描写があろう。...Но ничто не было так страшно для Якова, как *вареный картофель* в крови, на который он боялся наступить,...(Убийство)

し（резец），また名詞に付加され指小辞（братец）にもなる。[55]

このような多義的接尾辞に対しては，語彙比較集計表から，ец で終わるものを形式的に抽出してその数を数えても，意味をなさないことが多い。同様なことが他の接尾辞でも生じるので，この節では派生関係にある一群の語をその意義と共に記載したカードを主体に分析を進めるが，名詞を派生元とするカードは数が多く，これらで十分全体をカバーしていると思われる。[56] またこのカードを使うことにより，個別事例の検討にはなるが，パターン化の難しい様々な派生の形を扱うことが出来る。

まず個別事例の検討として，名詞派生で特徴的なものを取り上げてみよう。使用頻度が高く，一般的な意義の名詞を派生元とするものでは：

ум (3)→ умный (3) → умнейший (p)
умник (k) → умничать (k，p)
умствовать (r，k)→ умствование (r，k)
умствователь (r)
умственный (r) → умственность (r)

この例では умник，умничать の「利口者，利口ぶる」の口語的意義では，カラムジンとプーシキンで，「思索する」の意義の умствовать 以下では主にラヂシチェフで使われているのが分かる。

слава (3)→ славный (3) → славнейший (r，k)
(бесславный)→ бесславие (r，k)
(бесславить) → обесславить (k)
славить (3) → прославить (3)

[55] Ефремова (1996), стр. 141-144

[56] §6 の派生の傾向性で調査したカード：559 枚，借用語・地名などのカード：218 枚，派生が複雑でパターン化できなかったもの：66 枚の計 843 枚。

страх (3)→ страшный (3) → страшнейший (k)
страшить (3) → страшливый (k)
устрашить (r, k) → неустрашимый (r, k) →
неустрашимость (k)

8節で示した派生の幅と深さという点から見ると，プーシキンでの派生は浅く[57]通常の語彙しか派生されていないが（上記2例では3者共の(3)だけ），ラヂシチェフとカラムジンでは派生の幅が広くかつ深いことが，上記2例でも確認される。

ただプーシキンでも，特定の口語的意義の語彙に対しては，かなりの派生形が現れるが，そのような語は非常に少ない。例えば[58]

бес (p) → беситься (p) → перебеситься (p)
бешеный (3) → бешенство (k，p) → бешенствовать (r)
дура (k，p) → дурочка (p)
дурак (3) → дурачье (p)
дурацкий (p)
дурачить (3)
дурачество (r，k)

ラヂシチェフとカラムジンでは派生に幅と深さがあり，派生される語が多いことは既に述べたが，特にラヂシチェフでは文語的意義の語の派生が目立つ。

язва (r，k) → язвить (r) → язвительный (r) → язвительнейший (r)

[57] 派生された語が，次の派生で派生元になることが少ない。
[58] 同様な例は танец，ус でも見られる。

врач (3)→ врачебный (r)
врачевать (r, k)→ врачевание (r)
(врачеватель)→ глазоврачеватель (r)
врачевательный (r)
узда (3)→ уздечка (p)
(обуздать)→ обуздание (r)
обуздатель (r)
(обузданный)→ необузданный (p)→
необузданность (r)

上記の諸例から分かるのは，ラヂシチェフでは名詞を派生元としても，多くの場合，途中に動詞が生成され，それを経由してさらに多数の派生語が生じ，造語の深さも深くなることであり，これがラヂシチェフの特徴と考えられる。

一方カラムジンの場合は，文体的に中立な意義で現代ロシア語でも高頻度の名詞からの派生が目を引く。例えば上例の слава，страх と共に，下記の語に対してもこのことが当てはまる。

счастье (3)→ счастливый (3)→ счастливейший (r, k)
счастливец (k, p)
счастливить (k)→ осчастливить (p)
несчастливый (3)→ несчастливейший (k)
несчастье (3) → несчастный (3) → несчастнейший (k, p)

цвет (3)→ цветок (3) → цветочек (k)
цветочница (k)
цветник (k)
цвести (k, p)→ цветущий (r, k)
расцвести (k)
процвести (r, k)

круг (3)→ кружок (3)
круглый (3) → кругленький (k)
круглость (k)
круглеть (r)
кружиться (k，p)→ кружение (p)

現代ロシア語の高頻度で一般的意義を持つ，上記 5 個の名詞 слава，страх，счастье，цвет，круг で現れた派生語を，作家毎，品詞毎に以下のようにまとめると，カラムジンでの派生は各品詞で満遍なく，かつ高い頻度で出現していることが分かる。これに対してラヂシチェフでは，一般的な意義からの派生名詞の数が少ないこと，プーシキンでは語の意義に関わらず派生全般で，派生が浅く数も少ないことが確認されよう。

一般名詞からの派生	3 人共	R	K	P
A	6	4	9	1
N	3	1	7	2
V	3	3	7	3
計	12	8	23	6

これまでは口語的・文語的な意義で区別される，特定の語（語幹）の派生全体を見てきたが，次に派生元も派生先も名詞（N→N）の場合を見てみよう。この場合一番多いのは，指小辞による派生であるが，ец，ка，ок などの接尾辞はその多義性のため，語彙比較集計表からの語尾による抽出では，意味をなさないことはすでに述べた。ただ派生関係にある一群の語を記載したカードでは，ик，ок，ка，ко での派生で指小を示すものには，指小辞のマークを記入しているので，これらを使えばこの問題は回避される。

すでに 3 節で示しているが，三者の指小辞の使用頻度を見てみると，R：K：P：3 人共で，23：49：67：16 となり，プーシキンで一番多く，次がカラムジンで，ラヂシチェフは一番少ないことが分かる。また指小辞を二重に

使う場合でも（N→N→N：окно → окошко → окошечко など），同様な傾向が見られ，ラヂシチェフとの違いがより明確になろう。なおラヂシチェフでは，「指小形→指小形の指小形」の連続的な使用はなかった。

	（ик，ок，ка 等）	指小形	指小形の指小形	両形を共に使用
R	23	3	1	0
K	49	4	4	4
P	67	3	3	3
3 人	16	0	0	0

次に比較的長い接尾辞で，意義の多義性が回避できるものを，語彙比較集計表から抽出して検討するが，これらは主観的評価を伴うものが多い。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
у(ю)шка（人に対する愛称）						
бабушка	0	0	18	1	50	207
батюшка	5	6	107	1	182	57
вдовушка	0	0	2	1	3	2
дедушка	2	3	7	1	24	84
детушки	0	0	3	1	12	3
дядюшка	0	0	2	1	11	8
зятюшка	1	0	0	1	0	0
кумушка	0	0	3	1	4	2
мамушка	0	0	1	1	9	1
матушка	8	1	54	1	90	27
нянюшка	1	0	1	1	4	2
сватьюшка	1	0	0	1	0	0
солдатушки	0	0	1	0	1	1
старинушка	0	0	2	0	2	0
тетушка	3	0	3	1	7	8

хозяюшка	0	0	3	1	5	5
出現数	7	3	14			

その他の愛称：

маменька	0	2	2	1	11	2
папенька	0	0	3	1	25	0
муженек	1	0	0	1	3	0
солнушко[59]	1	0	0	0	(4)	0
出現数	2	1	2			

卑称：

бородишка	0	0	1	1	1	0
господчик	3	0	0	1	0	0
дворянчик	3	0	0	1	0	0
девчонка	0	0	2	1	14	63
деньжонки	1	0	0	1	2	6
женишок	2	0	2	1	2	3
клячонка	0	0	1	1	4	0
мальчишка	0	0	8	1	45	91
платчишко	1	0	0	0	0	0
стишок	0	0	2	1	18	7
шпажонка	0	1	0	1	0	0
出現数	5	1	6			

指大辞，口語，民衆詩語など：

плечище	0	0	1	1	1	0
деревенщина	1	0	0	1	0	3

[59] 標準的な形は солнышко。Pd の値はこの形によるもの。

дьявольщина	0	0	1	1	3	3
невидальщина	0	0	1	1	1	0
ноченька	1	0	0	1	0	0
сердечко	1	0	0	1	1	1
словечко	0	0	1	1	7	12
出現数	3	0	4			

主観的評価を伴う上記接尾辞の出現数を総計すると，R：K：P＝17：5：26 となり，これら口語的・俗語的語彙の使用がプーシキンで多いのは当然であるが，ラヂシチェフの使用が 17 個で，第二位になっているのは意外である。しかもこれらの語彙の内 7 個は，プーシキンの全作品の語彙を集計した，プーシキン辞典にも対応するものはない（Pd＝0）。しかしこれらの語は，その場限りの機会語ではなく，現代ロシア語ともつながっている（Z＝0 は 1 個だけ）。

このような点から，ラヂシチェフにおける主観的評価を伴う口語的・俗語的接尾辞の使用は，プーシキンとは異なった，ラヂシチェフ独自の方向性を持ったものと判断できる。一方ロシア文章語の近代化を進めたとされるカラムジンで，これらの語彙がほとんど使われていないのは意外と思われるかもしれないが，これは，語彙の幅を広げすぎないようにする彼の言語意識の反映ではないかと思われる。

三者の名詞派生の特徴をまとめると，次のようになろう。

ラヂシチェフ：文語的語彙に対する，深い派生

カラムジン：基本的な語彙に対する，広く深い派生

プーシキン：口語的な接尾辞による，浅い派生

§11　プーシキンでの動詞派生

8 節から 10 節で，動詞，形容詞，名詞を派生元とする造語体系をラヂシチェ

フ，カラムジン，プーシキンの諸作品で検討してきたが，その中でプーシキンは全体的に，派生による複雑な語彙拡張には消極的であることが明らかになった。実はこのことは，2 節で品詞分布について Haberman 法で検討して得られた，「プーシキンでは動詞が極端に多く，その反対に名詞と形容詞がかなり少ない」という結果と，関連していると思われる。

これまで本論で扱った動詞派生は，8 節の動詞から名詞への派生（V→N）における，動名詞と行為者名詞が主であった。接辞による動詞から動詞への派生（V→V）は完了・不完了体の派生なので，本論では派生された動詞が二次的な派生元になる場合を除いて，これらを直接扱わなかったが，この節では一般的な意義で使用頻度の高い基幹動詞に対して，接辞によるこの派生も含めて検討しよう。先ず，示唆的な例として：

терпеть (3)→ терпение (3)　　→ нетерпение (3)
　　терпимый (r，k)→ терпимость (k)
　　(нетерпимый)　→ нетерпимость (k)
　　терпеливый (3)　→ нетерпеливый(3)→ нетерпеливость (r)
　　[V]：претерпеть (3)／потерпеть (k)／утерпеть (k，p)／
　　вытерпеть (3)／натерпеться (p)／стерпеться (p)

上例では，терпеливый までは，ラヂシチェフとカラムジンでの名詞，形容詞の深い派生がみられるが，претерпеть 以下の接頭辞による動詞→動詞の派生では[60]，プーシキンでの場合も多く観察される。また以下の例でも名詞，形容詞の派生は三者で共通だが，動詞ではプーシキンの接頭辞による派生が目を引く。

любить (3)→ любовь (3)　　→ любовник (3)→ любовница (3)
　　любовный (3)
　　любитель (3)
　　любимый (k，p)→ любимец (3)

[60] 接頭辞による派生動詞は，[V]：以下で示す。なお語毎のスラッシュ（／）は，これらの語が派生関係にはなく，同列であることを示している。

люблeние (r)
влюбиться (3)　→ влюбляться (3)
возлюбить (r)　→ возлюблять (r)
［V］：полюбить (k, p)／отлюбить (p)／разлюбить (p)／слюбиться (p)

上記 терпеть と любить での派生語を品詞毎に集計してみると，名詞，形容詞では三者共通以外にはほとんど派生のないプーシキンが，動詞派生で群を抜いていることが分かる。

	3 人共	R	K	P
A	3	2	2	1
N	7	1	2	0
V	4	2	3	7
計	14	5	7	8

語彙リストによる表示は省略するが，他にも次のような基幹動詞で同様な派生が見られる。

звать の派生形	3 人共	R	K	P
A　N	6	1	4	3
V	6	3	2	5
брать の派生形				
A　N	8	4	12	8
V	8	2	5	8
делать の派生形				
A　N	4	1	4	7
V	2	3	8	8
жить の派生形				
A　N	5	7	2	2
V	1	3	6	7

4 動詞の集計

A	N	集計	23	13	22	20
	V	集計	17	11	21	28

一方運動の動詞では：

бежать (3)→ бегать (3)→ бегство (3)
бег (p)
беглый (k, p) → беглец (p)
прибежать (3) → прибегать (3)
прибежище (r, p)
убежать (3) → убегать (3)
убежище (3)
набежать (p) → набег (k)
побежать (3) → побег (3)
перебегать (k)→ перебежчик (p)

［V］：вбежать (p)/вбегать (p)/взбежать (p)/выбежать (k, p)/выбегать (k, p)/добежать (r)/забежать (p)/забегать (p)/избежать (p)/избегать (r, p)/обежать (p)/отбежать (p)/подбежать (3)/подбегать (k)/пробежать (p)/пробегать (p)/разбежаться (k, p)/сбежаться (p)/сбегать (p)

上記 бежать/бегать の派生形の数を集計すると，下記のようになる。なおVでのカッコ内の数値は，接頭辞で派生された вбежать 以下の動詞だけをカウントしたものであり，プーシキンで接頭辞による動詞派生が非常に活発になされていることが理解されよう。

		3 人共	R	K	P
A	N	3	1	2	5
V		7 (1)	2 (2)	5 (4)	17 (16)
計		10	3	7	22

これまで語彙比較集計表からは，主に RLEX によるソートで同一接尾辞の語を抽出してきたが，同じ手続きで，同一基幹動詞の異なる接頭辞による派生形を取り出すこともできる。以下は語末が ехать，езжать で終わる動詞を抽出したデータだが，この領域ではプーシキンでも派生の幅が非常に広いことが，このデータから理解されよう。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
въехать	1	15	8	1	32	5
выехать	3	28	11	1	52	33
доехать	4	3	1	1	18	13
ехать	19	108	59	1	388	236
заехать	1	4	3	1	24	21
наехать	1	1	2	1	11	0
объехать	0	1	3	1	18	3
отъехать	4	5	2	1	9	0
переехать	0	12	0	1	15	17
подъехать	1	2	7	1	18	17
поехать	5	52	43	1	143	240
приехать	9	78	41	1	302	326
проехать	0	17	3	1	23	25
разъехаться	0	1	3	1	12	4
съехаться	0	0	1	1	7	5
уехать	1	18	16	1	88	111
взъезжать	0	0	1	1	1	0
въезжать	2	1	1	1	6	1
выезжать	1	5	4	1	29	17
доезжать	0	4	1	1	6	0
езжать	1	1	0	1	7	2
заезжать	0	1	1	1	12	2

объезжать	0	1	0	1	4	3
отъезжать	1	0	1	1	0	7
переезжать	1	5	0	1	4	13
подъезжать	2	3	2	1	18	11
приезжать	4	13	8	1	57	64
проезжать	4	6	6	1	16	8
разъезжать	1	0	6	1	25	1
разъезжаться	0	1	0	1	3	1
съезжаться	1	3	2	1	12	6
уезжать	0	1	0	1	8	81
見出し語数	21	28	26			

同様な作業を他の運動の動詞でも行い[61]，接頭辞の違いによる異なり見出し語の数を集計すると：

LEX			R	K	P
-вести	—	-водить	26	27	30
-нести	—	-носить	22	29	23
-йти	—	-ходить	43	43	37
-везти	—	-водить	11	15	16
-лететь	—	-летать	12	14	7

以上のデータからも，基幹動詞の接頭辞による派生に関しては，プーシキンはラヂシチェフ，カラムジンと比べてなんら遜色のないことが分かる。一方名詞，形容詞の派生に関しては，プーシキンは，ラヂシチェフのように文語的な接尾辞を大量に形式的に使用することも，カラムジンのように複雑な造語手段を用いることもなく，その使用は口語的なものが中心で，派生も浅いものに限られている。その結果，プーシキンでは動詞の占める相対的な割

[61] -плыть はデータ数が少なくて対比できなかった。

合が大きくなり，この節の始めで示した事態が生じるのではないかと推定される。

これがラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの三者だけで比較した場合のプーシキンの特殊性なのか，それとも一般的にこの時期のロシア文章語の中でのプーシキンの特殊性なのかは，現在のところ，データが不足するため確定的なことは言えない。これに関連して Виноградов は，以下の Лопатто の研究を引用している。これはかなり古いものであるが，その内容は，手作業による客観的な頻度計算と考えられるので，今でも通用するものと思われる。[62]

Лопатто の計算では，「スペードの女王」中での品詞の割合は，動詞 40%，名詞 44%，エピテット（形容詞）16%であるとされたが，この値は本論 2 節でプーシキンの 4 散文作品に現れる動詞，名詞，形容詞を集計し，百分率を出したものに極めて近い（各々42，44，14%）。Лопатто の研究ではさらに，ゴーゴリの「死せる魂」における三品詞の割合も示されていて，それによると動詞，名詞，形容詞は各々31，50，19%であるという。そしてこの割合は，実はカラムジンに非常に近いものである(33，49，18%)。一方レールモントフの「現代の英雄」について，公開されている電子データを使い，そこに現れる動詞，名詞，形容詞の頻度数の簡易集計を試みた。[63] 以上をまとめると，以下のようになる。

---

[62] Виноградов (1938［1982]), стр. 273。なお Лопатто のこの研究は，1918 年に発表されている。

[63] cfrl（Computer Fund of Russian Language, http://www.irlras-cfrl. rema. ru: 8100）の電子データを使い，浦井が作成した形態解析プログラムで形態解析を行い，変化語形を見出語に戻した後，そのデータを北大院生の山路明日太君に整理してもらった。具体的な数値は動詞 8426 個，名詞 8166 個，形容詞 3216 個であった。

	Radi	Kara	Push	スペードの女王	現代の英雄	死せる魂
V	35(%)	33	42	40	43	31
N	50(%)	49	44	44	41	50
A	15(%)	18	14	16	16	19

ゴーゴリとレールモントフについては，一作品だけの集計のため確定的なことは言えないが，ラヂシチェフ，カラムジン，ゴーゴリに共通しているのは，名詞の割合が大きいことで，一方プーシキンとその後継者とされるレールモントフで共通なのは，動詞の割合が大きいことである。ゴーゴリとレールモントフ以降のデータが無いため，これが何を意味しているかの即断は出来ないが，少なくとも二つの文体的タイプがあることは分かるであろう。

§12　抽象名詞の類義語

18 世紀のロシア語の特徴として，接尾辞の違いによる多数の類義語の存在が指摘されている。抽象名詞を形成する接尾辞 ость，ство，ота，ина，изна，ыня 等の生産性は，17 世紀までは等しかったが，18 世紀になると，ость による抽象名詞の形成が集中的に行われ，他の接尾辞では語形成の活性が失われたと言われている。[64] そこでこの節では ость を中心とした，類義的な抽象名詞の派生について検討しよう。

しかしこれまでデータを抽出してきた語彙比較集計表で，接尾辞の違いによる類義語の組を探しても，あまり多くの例は集まらなかった。これは 18 世紀末では類義語のかなりのものが，すでに整理されているためではないかと推察されるので，18 世紀初頭からの類義語を分析した四つの論文や研究書を参考に[65]，そこで取り上げられた類義語を取り出し（例えば высокость），こ

[64] Мальцева (1966), стр. 262，Очерки-Измен. (1964), стр. 104,111
[65] Казанская (1972), Данилова (1972), Мальцева (1966), Очерки-Измен. (1964),

れを語彙比較集計表から抽出した語（высота）に加えて，全部で 134 の類義語の組を作り（высокость－высота，三成員の例：безопасность－безопасство－безопасствие），これらについて検討した。

なお類義語を分析する際に難しい点は，例えば 18 世紀からの ость による抽象名詞の集中的な形成と他の接尾辞の排除という，全体的な傾向を把握するのは容易だが，個別の語の選択では必ずしも傾向通りには行われず，その場合なぜその語形が選択されたかの説明が出来ないことが多いことである。例えば тягость－тягота の対では，一般的な傾向に従って前者が残ったが，высокость－высота の対では逆に後者が残っている。[66]

抽象名詞類義語の検討を行うこの節では，ザリズニャクの辞書への登録の有無(Z＝1/0)，即ち約十万語の現代ロシア語に引き継がれているかを，主要な指標として使った。また比較語彙表には無く，上記 4 論文から追加された語には，新たにこの指標と共に，プーシキン辞書での頻度(Pd)，現代語頻度辞書での頻度 (Fd) も補助データとして追記した。これら追加された語では，語末の同形異義識別番号が付加されていないので，これによって区別される。例えば：

	LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
比較集計表あり	безопасность1	1	3	3	1	14	72
追加	безопасство	0	0	0	0	0	0
追加	безопасствие	0	0	0	0	0	0

類義的抽象名詞の内で，一番数の多い組は，ость－ство で 37 組あった。これをザリズニャクの辞書への登録の有無で分類すると，全体的な傾向に従っ

стр. 104-119

[66] Казанская (1972) は высота の選択を，接尾辞 ота の文体的中立性で説明しているが (стр. 63)，тягота ではこの語の文体的指標は「古語，教会スラヴ語」となるため，統一的な説明ができない。

て ость だけが残って登録されているもの（Z＝1,0）が 17 組，共にあり（Z＝1,1）が 14 組，全体的な傾向に逆らって ство だけが残っているもの（Z＝0,1）が 6 組であった。

ость だけが登録されているのもの（Z＝1,0）は全て[67]，以下の例のように，追加された ство の方の語形の頻度は全てゼロであったので，すでに類義語の整理が済んでいると考えられる。

	LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
	глупость1	0	2	2	1	52	55
追加	глупство	0	0	0	0	0	0
	дикость1	0	3	0	1	8	6
追加	дичество	0	0	0	0	0	0

両者ともあり（Z＝1,1）の場合で以下の 8 組では，3 人の作家の語彙で二重形が使われている。内訳はラヂシチェフが 7 組，カラムジンが 6 組，プーシキンが 1 組であった。[68]

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
вещественность1	3	1	0	1	2	1
вещество1	5	2	0	1	0	453
естественность1	5	0	0	1	1	0
естество1	9	2	0	1	0	0
ничтожность1	1	2	0	1	14	2
ничтожество1	1	2	1	1	15	8
общественность1	(1)	2	0	1	0	41

[67] взаимность，глупость，дикость，надобность，неблагодарность，ненасытность，неприязненность，неприятность，опасность，опрятность，приятность，рачительность，смелость，суетность，суровость，храбрость，учтивость

[68] プーシキンでは，研究対象の作品ではこれらの語の使用は限られているが，プーシキン辞典の数を見てみると，5 組ある。なお общественность の R での(1)は，この語は「旅」にはなかったが，彼の他の作品で使われていたことを示している。

общество1	59	40	9	1	148	472
обязанность1	4	2	4	1	36	60
обязательство1	2	1	0	1	4	52
существенность1	3	0	2	1	4	0
существо1	10	13	0	1	9	114
торжественность1	0	2	1	1	3	2
торжество1	2	7	4	1	41	24
юность1	12	9	2	1	70	72
юношество1	3	1	0	1	6	6

これらの語の多くは形容詞語幹から派生され，性質または状態を示すものであったが，19 世紀前半に接尾辞の分化が進み，ость は性質，ство は状態の意義を持つようになったと言われている。[69] また ство は形容詞以外にも名詞や動詞からの派生も可能であり，対象的意義も持っている。このような事情から ство の名詞は ость の名詞によって駆逐されることなく，両者が共に使われ続けてきたと考えられる（вещественность：物質性，вещество：物質）。

一方 ость－ство の Z＝1,1 の対で上記以外の 6 組では，ость を持つ語は比較集計表には無くて追加された名詞の場合が多く，ство の方が優勢であった。またその傾向はプーシキン辞典，頻度辞典でも確認される。これらは実質的には Z＝0,1 に近いものと思われる。[70]

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd	
буйность	0	0	0	1	1	0	
буйство1	0	0	1	1	5	1	
пространность	0	0	0	1	0	0	
пространство1	8	14	0	1	12	104	等

[69] Казанская (1972), стр. 62

[70] буйство, постоянство, пространство, свирепство, человечество, хвастовство

ость－ство で Z＝0,1 の組は 7 組あったが，二つの接尾辞を使った二重形は無かったので，これらでもすでに類義語の整理が済んでいると考えられる（бесстыдство, единство, знакомство, излишество, любопытство, неудобство, равенство）。これらは，18 世紀に ость の造語の生産性が高まり，ство を持つ語を駆逐していったとする一般的な傾向に逆行するものであるが，なぜそうなったのかの詳細は不明である。なお Z＝0 で ость による造語が，ラヂシチェフとカラムジンで 3 個あった。[71]

同様なことが，ота－ость（9 組）についても言える。ザリズニャクへの登録がある ота と登録されていない ость の組（Z＝1,0）では，ость の語の頻度は全てゼロであったので，一般的な傾向に反して，生産性はないが規則的な接尾辞 ота で，類義語の整理が行われたと考えられる。[72]

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd	
быстрота1	1	4	2	1	22	37	
быстрость	0	0	0	0	0	0	
высота1	0	7	3	1	59	144	
высокость	0	0	0	0	0	0	等

両者が登録されているもの（Z＝1,1 で 2 組）では，接尾辞の違いによる類義語が生じているが，ここでは ость の方が優勢であり，両者が使われているのはラヂシチェフだけであった。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
тягость1	4	6	0	1	3	8
тягота1[73]	1	0	0	1	0	4
щедрость1	2	0	0	1	5	8

[71] единственность, излишность, неудобность

[72] быстрота, высота, густота, нагота, острота, пестрота, теснота, чернота, чистота

[73] тягота には Сл. 1847 で，Церк. и Стар. Тоже, что тягость の記述あり。

щедрота1　　3　　1　　0　　1　　9　　0

同様な現象が，ина－ость，изна－ость でも見られる。ここでも優勢なのは，18 世紀の一般的な傾向の ость ではなく，ина，изна によるものであった（глубина，тишина，белизна，крутизна）。

ゼロ接尾辞が関係する類義語では，ゼロ接尾辞－ость が 7 組，ゼロ接尾辞－ота が 5 組，ゼロ接尾辞－ина が 3 組あったが[74]，両者で意義的な差異があることが多く（ゼロ語尾は具体的な意義，ость は性質的意義[75]），両者が共にザリズニャクに登録され（Z＝1,1），三者の作品で使われていることが多い。ゼロ接尾辞だけが登録されているものは，ゼロ接尾辞－ость の組で 2 つあり（свобода－свободность，зелень－зеленость），その内 свободность は三者とも使っていない。

ние－ость の対は全部で 27 組あった。ただこの対は，ние が動詞に関連して状態を，ость は実詞と関連して性質を示すことが多く，類義関係は間接的であり，一方が他方を排除する傾向は少ない。[76] 両者がザリズニャクに登録されているもの（Z＝1,1 で 20 組）には，さほど特徴は見られなかったが，接尾辞 ость だけが登録されているもの（Z＝0,1 で 6 組）で，登録されていない ние が使われているのはラヂシチェフだけであった。[77]

以上より 2 成員の類義語については，意義的に違いのあるものは，両者が

---

[74] 語彙リスト：ゼロ－ость：влага－влажность，воля－вольность，зелень－зеленость，зло－злость，мрак－мрачность，свобода－свободность，смрад－смрадность.ゼロ－ота：дрема－дремота，краса－красота，срам－срамота，тьма－темнота，тепло－теплота.ゼロ－ина：верх－вершина，скот－скотина，холст－холстина

[75] Казанская (1972), стр. 64,

[76] Казанская (1972), стр. 61，語彙リストは省略する。

[77] умерение, радование, проницание

平行して使われ，また意義的に大きな差のないものは，ラヂシチェフで一部両形が使われているが，18 世紀末の時点で整理済みのものが多いことが分かる。

次に類義語が三成員で，数の多いものをあげると以下のようになる。

ость－ствие－ство の場合，これらはいずれも Z＝1 になり得るが，どれが選択されて残るかは各々の語によって様々である。なお ство と ствие の意義的相違は，19 世紀には，人間を示す名詞からの抽象名詞は ство で，それ以外の名詞からの抽象名詞は ствие と ие が残ったとされるが，[78] сходство や чувство のような例もあり一概には言えない。ただ Z＝0 のものはラヂシチェフを除いて，使われていないことが多く，この組もすでに整理ずみと考えられる。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
безопасность1	1	3	3	1	14	72
безопасствие	0	0	0	0	0	0
безопасство	0	0	0	0	0	0
беспокойность	0	0	0	0	0	0
беспокойствие	(3)	0	0	0	0	0
беспокойство1	0	8	16	1	50	31
действительность1	2	0	0	1	1	84
действие1	25	46	14	1	123	352
действо1	0	2	1	1	3	0
коварность	0	0	0	1	1	0
коварствие	0	0	0	0	0	0

[78] Очерки-Измен. (1964), стр. 118

коварство1	7	2	1	1	9	3
сходственность	(19)	0	0	0	0	0
сходствие	(12)	0	0	0	0	0
сходство1	0	13	3	1	17	25
чувствительность1	10	23	0	1	15	11
чувствие1[79]	5	0	0	1	2	0
чувство1	24	119	33	1	287	248

ие－ость－ство の場合は以下のようになる。上記の場合と同様に，どれが選択されるかは各々の語によって異なるが，Z＝0 のものは使われていないことが多く，すでに類義語の整理は済んでいて，現代語と同じ状態であると考えられる。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
величие1	9	12	2	1	20	39
великость1	2	2	0	0	0	0
величество1	6	5	2	1	168	11 [80]
изобилие1	4	11	0	1	5	22
изобильность	0	0	0	0	0	0
изобильство	0	0	0	0	0	0
изящие	0	0	0	0	0	0
изящность1	6	0	0	1	1	0
изящество	0	0	0	1	2	4

[79] Сл. 1847 には Церк. Тоже, что чувство の記述がある。

[80] величать に由来する величание と，величина（大きさ）は意義が異なるので除いた。

наследие1	5	0	0	1	4	16
наследственность1	1	0	0	1	0	3
наследство1	0	7	2	1	23	16
приличие1	0	0	3	1	28	2
приличность1	0	1	0	0	0	0
приличество	0	0	0	0	0	0
удобие	0	0	0	0	0	0
удобность1	1	7	0	1	7	0
удобство	0	0	0	1	3	14

ゼロ語尾－ость－（ство/ота/ие）の組を見てみると，ゼロ語尾の語はかなり多義的であり高い頻度を示す一方，その他の接尾辞でZ＝0のものは上記と同じことが言えよう。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
добро1	9	9	6	1	46	83
доброcть	0	0	0	0	0	0
доброта1	1	2	1	1	4	9
жаль1	0	30	11	1	132	74
жалость1	5	1	2	1	18	22
жаление	0	0	0	0	0	0
знать3	0	0	5	1	22	2192 [81]
знатность1	4	1	1	1	6	0

[81] знать3は挿入語。Засорина (1977) では，動詞と名詞と挿入語を区別しておらず，その場合には数値に△△のマークがある。

знатство	0	0	0	0	0	0
разнь	0	0	0	0	0	0
разность1	(5)	1	0	1	4	10
разнота	0	0	0	0	1	0
разнствие	0	0	0	0	0	0
разница1	1	10	1	1	30	40
тайна1	2	17	23	1	103	120
тайность	0	0	0	1	0	0
таинственность1	0	0	2	1	4	3
таинство1	5	1	2	1	9	1

以上から，18 世紀末から 19 世紀始めにかけてのラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンの言語においては，18 世紀初頭の類義語の組は相当に整理され，ラヂシチェフで一部類義語が平行して使われていることを除けば，現代語の語彙体系に近い形になっていたと考えられる。

18 世紀の類義語では，当然のことながら上記以外にも，例えば借用語幹から形容詞を形成する ский－ический 等が問題になる。しかし形容詞に対しては，名詞の場合のように組を作れるほどまとまった資料が無いので，語彙比較集計表で該当する語尾で対になるものを取り出すと 4 組あった。その内でカラムジンは 3 組の両形を使っているので，彼のこれらの形容詞の使い方を検討してみよう。

LEX	R	K	P	Z	Pd	Fd
геройский1	0	2	0	1	2	8
героический1	0	5	1	1	6	40
готский1	0	3	0	1	0	0
готический1	0	23	1	1	7	3

олимпийский1	0	1	0	1	2	67
олимпический1	1	0	0	0	0	0
философский1	2	12	1	1	1	40
философический1	1	8	0	1	14	0

Очерки-Измен.(1964)では，ский－ический(例えば демагогский と демагогический）の意義分化が19世紀を通して行われ，ский は人間と（демагогский－демагог)，ический は対象や概念と（демагогический－демагогия）関連するようになったが，それまでは両者はしばしば区別されずに使われていたとされる。[82]

また同書では，геройский と героический に関しては，геройский－герой と героический－героика の関連を，готский－готический に関しては，готский－гот と готический－готика の関連を示している。前者についてはカラムジンでは，(геройские／героические)дела の表現があり両者に明確な区別は無いと思われる。後者については，готский は全て大文字で始まりГотский(ゴート人の）（трон／Герцог／Принц)の語結合で使われているが，一方 готический(ゴチックの)は вид，вкус，башня，дом 等の名詞と結びついていて，明らかに意義分化が認められる。

一方 философский－философический については，別の展開があったことが指摘されている。[83] それは前者が後者に固有であった意義を獲得して，後者の使用を駆逐したことである。ちなみに現代ロシア語では философический は，（廃）または（旧）の指標がつき，философский と同義とされている。

しかしカラムジンでは両者の間に意義的区別をしている場合もあり，例えば философский камень（賢者の石， 3回)，вести философскую жизнь 等では明らかに人間と関連した「哲学者の」の意味と思われる。しかし философ-

[82] Очерки-Измен. (1964), стр. 387
[83] op. cit. стр. 389

ский трактат と философический (книга，сочинение) では差がないと思われる。

興味深いのはプーシキンの場合で，彼のほぼ全作品での使用頻度を記録したプーシキン辞典での使用回数を検討すると，философский は философский камень の形で 1 回だけ使われ，他は 14 回の全てで философический が使われ，рассуждение, статья, переписка 等の語と結びついていた。これはプーシキンの用法が現代語と逆であったことを示していよう。

§ 13　結語

本論文は主に，2 節の Haberman 法で示された，ラヂシチェフ，カラムジン，プーシキンでの名詞，形容詞，動詞の品詞分布における以下の違いを解明する形で，分析を進めていった。

- ラヂシチェフでは名詞が多く，形容詞が少ないが，その差は他の二人ほど極端ではない。
- カラムジンでは，形容詞が極端に，また名詞もかなり多いが，その反対に動詞は極端に少ない。
- プーシキンでは，動詞が極端に多く，その反対に形容詞と名詞が，相当に少ない。

その際，三者の語彙統計をコンピューター上で重ね合わせ，そこに補助的情報を付加した語彙比較集計表を作成し活用した。このデータは，派生関係にある同一語幹の一群の語をまとめてカードを作成する際にも，また語生成の問題を形式的に扱うために，見出し語を語末からの逆順で並び換え，該当する接尾辞を持つ語群を抽出する際にも，極めて有効なものであることが分かった。

そして三者の語彙を，名詞，形容詞，動詞に分けて派生関係から詳細に検討した結果，上記の三者の差異は，彼らの造語体系の相違が大きく反映したものであることが明らかになった。さらにこの差異は，三者の統語構造の違

いも雄弁に物語っていると思われるので，最後にこの点を含めて，総括してみよう。

まずラヂシチェフでは動詞から名詞の派生が多く，しかもその中では，形式的な動名詞や行為者名詞が大量に派生されていた。またその中には動詞性が高く，複文のシンタクスが圧縮された機会語の行為者名詞の例もあり，彼の表現は，「漢文的な」表現の圧縮がなされていることが多いと考えられる。このことはまた，形容詞から抽象名詞の派生に関しても言えよう。彼の造語は文語的意義の語に対して，「派生の深さ」が深く，「派生の幅」も広いものであった。このような語彙を使った文章では，意味が圧縮されて詰め込まれ，統語関係も複雑で，読みにくいものになっていると言えよう。

これに対してカラムジンでは本来，形容詞の使用が多く，しかもそれらが積み重ねられて使われることも多かった。またそれと同時にラヂシチェフほどではないが，口語的な語彙で，動詞から名詞，名詞から名詞や形容詞（特に借用語の場合），形容詞から形容詞や名詞への派生も多く，その結果動詞の割合が相対的に少なくなったと考えられる。カラムジンの文章は，ラヂシチェフに比べてはるかに読みやすいが，どこか静的な印象を与えるところがあるのは，名詞と形容詞に重点が置かれたこのような構造にも関係していよう。

プーシキンでは名詞や形容詞に，指小・指大や主観的評価を示す口語的な接尾辞を使うことはあったが，ラヂシチェフでの動名詞や行為者名詞のように，それらを形式的に大量に適用することはなく，またラヂシチェフやカラムジンのような複雑な造語体系を使用することも少なかった。彼の語彙で特徴的なのは，基幹動詞からの接頭辞による動詞派生であり，この点に関しては，二者と比べても何ら遜色はなかった。その結果プーシキンでは，動詞の占める相対的な割合が大きくなったと考えられる。プーシキンの文章が，読みやすく簡潔でしかも力強い印象を与えるのは，正にここに由来しよう。

このことを裏づけるのは，三者の文の長さ（一文中に含まれる語数）に関する比較である。データベースを運用して[84]，一文中の語数とそこに含まれる動詞数を集計すると，以下のようになった。

	R	K	P
データ中の全文数	3,528	10,176	6,237
文の長さの平均（語数）	14.47	13.90	10.75
１動詞文の数と割合	1,030(29%)	2,814(27)	2,188(35)

このデータから読めるのは，文の長さの平均値はラヂシチェフで一番長く(14.5 語)，プーシキンで一番短い (10.8 語) こと，また動詞を１個だけ含む文の割合が，プーシキンで一番大きい(35%)ことである。これはラヂシチェフの文章では，意味が圧縮されて詰め込まれ，統語関係も複雑であるのにたいして，プーシキンの文章は，動詞の占める割合が大きく，読みやすく簡潔であることに対応していよう。

一方カラムジンの文の長さは，ラヂシチェフに近いが，実際には両者の文にはかなり大きな違いがある。これを検討するためには，両者の統語構造の相違を分析する必要があろうが，現在のところ，確実な構文解析プログラムが存在しないため，本論では扱わない。ただカラムジンの文章では，名詞と形容詞に重点が置かれ，語が積層して使われるために，文が長くなるのではないかと考えている。

最後に造語体系の問題からは若干ずれるが，使用語彙の範囲の観点から三者の言葉を見てみると，その幅が一番広いのは，ラヂシチェフである。ビノクールが「ロモノーソフがロシア文学に遺した三つの文体は，ラヂシチェフの作品では決して一つの全体に融合することはなく，それぞれが個別に自身

[84] 文の区切りについては注 53 を参照。なおここでは大文字では始まらないが，統辞論的な区切りを示すコロンも，文区切りとして設定した。また本論は散文を対象にしているので，ラヂシチェフの「旅の」Тверь の章で，詩の部分はデータから外している。

の機能を担っていた」と述べているように[85]，ラヂシチェフは「旅」の中でスラヴ形とロシア形の語彙を，各章のテーマによって使い分けている。[86]

またラヂシチェフに教会スラヴ語の語彙が多いのは当然であるが，10 節で述べたように，彼は口語・俗語もかなり使っており，しかも зятюшка, сватьюшка, господчик, дворянчик, деревенщина, ноченька の 6 語は，プーシキン辞典には登録されていないが (Pd＝0)，現代ロシア語につながる語彙である(Z＝1)。従って，既に述べたが，ラヂシチェフにおける主観的評価を伴う口語的・俗語的接尾辞を持つ語の使用は，彼独自の方向性を持ったものと言えよう。

一方ロシア文章語の近代化を進めたカラムジンで，これらの語彙がほとんど使われていないのは，語彙の幅を中庸に保とうとする彼の言語意識の反映と思われる。

ラヂシチェフの語彙に幅のあることを示す別の根拠として，総語彙数を異なり見出し語数で割った，一見出し語当りの使用数がある。この数が大きいと一見出し語当りの使用数が多く，同じ語を繰り返し使うことを示している。なお三者のデータ量をそろえるため，カラムジンでは第 1 部と 2 部で集計した。[87] 総語彙数にそれほど差がないにもかかわらず，一見出し語当りの使用数は，ラヂシチェフ＜プーシキン＜カラムジンの順となり，ラヂシチェフで語の使用が一番多彩であることが分かる。

	R	K（第 1，2 部）	P
異なり見出し語数	7,265	6,863	7,603
総語彙数	50,356	63,082	63,736
一見出語当りの数	6.931	9.191	8.383

[85] Винокур (1943 [1959]), стр. 160

[86] 浦井康男（1999），p. 72 以下参照。

[87] 念のため第 3，4 部でも集計したが，異なり見出し語数は 8168，総語彙数は 75146，一見出し語当りの数は 9.200 となり，ほぼ同じであった。

一方カラムジンの数値が一番高のは，ロシア文章語の近代化・大衆化を押し進め，同一の語を何度も使って，読みやすく平易なロシア語を目指したカラムジンの指向を，そこに読み取ることができよう。

参考文献

コンコーダンス：

Urai (1997): Urai, Y., ed. A Lemmatized Concordance to The Captain's Daughter of A. S. Pushkin. xxiv+576, Fukui: Fukui U, 1997

Urai (1998): Urai, Y., ed. A Lemmatized Concordance to A Journey from Petersburg to Moscow of A. N. Radishchev. xiv+713, Sapporo: Hokkaido U, 1998

Urai (2000): Urai, Y., ed. A Lemmatized Concordance to Letters of a Russian Traveler of N. M. Karamzin. xix + 1375, Sapporo: Hokkaido U, 2000

Urai (2002): Urai, Y., and Horikoshi, S., ed. A Lemmatized Concordance to "the Prose Works of A. S. Pushkin: PETER THE GREAT'S BLACKMOOR, THE TALES OF BELKIN and THE QUEEN OF SPADES". xv+ 437, Sapporo, 2002

テキスト：

Радищев (1952): Радищев А. Н., Избранные философские и общественно-политические произведения. Под ред. И. Я. Щипанова, 1952, Гос. изд-во политической литературы

Радищев (1992): Радищев А. Н., Путешествие из Петербурга в Москву, Вольность. Издание подготовил В. А. Западов, СПб., Наука, 1992, Серии 〈Литературные памятники〉

Карамзин 1 (1984): Карамзин Н. М., Письма русского путешественника. Издание подготовили Ю. М. Лотман, Н. А. Марченко, Б. А. Успенский, Л., Наука, 1984, Серии 〈Литературные памятники〉

Карамзин 2(1984): Карамзин Н. М., Сочинения в двух томах, Автобиография, Письма русского путешественника, Повести. Л., Худ. лит., 1984

Пушкин (1948): Пушкин А. С., Полн. собр. соч. М.;Л., Изд−во АН СССР, 1948, т. 8-1

辞書：

Ефремова (1996): Ефремова Т. Ф., Толковый словарь словообразовательных

единиц русского языка. М., Русский язык, 1996

Ефремова (2000): Ефремова Т. Ф., Новый словарь русского языка, толково-словообразовательный. М., Русский язык, 2000

Засорина (1977): Частотный словарь русского языка. Под ред. Л. Н. Засориной, М., Русский язык, 1977

Зализняк (1977-2003): Зализняк А. А. Грамматический словарь русского языка. М., Русский язык, 1977, 1987, 2003

САР*1*: Словарь Академии Российской 1789-1794. М., МГИ, 2001-06

САР*2*: Словарь Академии Российской 1806-22. СПб., (Reprint in 1971 by Odense Univ. Press).

Сл. 1847: Словарь церковно-славянскаго и русскаго языка. сост. Вторымъ отделениемъ Императорской Академии Наукъ, 4 тт. СПб., 1847 (Reprint in 1989 by Ozorasha, Tokyo).

Срезневский (1971): Срезневский И. И. Материалы для словаря древне-русскаго языка по письменнымъ памятникамъ. 3 тт. СПб., 1893-1903 (Reprint in 1971 by Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz-Austria)

Сл. Пушк.: Словарь языка Пушкина. 4 тт. М., ГИС., 1956-61. 及び Новые материалы к словарю А. С. Пушкина, Наука, М., 1982

Тихонов (1985): Тихонов А. Н., Словообразовательный словарь русского языка в двух томах. М., Русский язык, 1985

Словарь русского языка XI-XVIIвв. М., Наука, 1975-

Словарь русского языка XVIII века. Л., Наука,1984-

Bartoszewicz (1985): Bartoszewicz A., Komendacka I., Indeks a tergo sl'ownika języka Aleksandra Puszkina. Wydawnictwa Uniw. Warszawskiego, 1985

Worth (1970): Russian Derivational Dictionary. Worth D. S., Kozak A. S., Johnson D. B., Elsevier, New York, 1970

研究書・論文等

Виноградов (1938[1982]): Виноградов В. В., Очерки по истории русского литературного языка XVII-XIX веков. изд. 3-е, М., Высшая школа, 1982

Винокур (1943[1959]): Винокур Г. О., История русского литературного языка. 1943, Избранные работы по русскому языку. УЧПЕДГИС, М., 1959

Данилова (1972): Данилова З. П. Из наблюдений над суффиксальной синонимией отглагольных имен (на материале языка А. Н. Радищева), Развитие синонимических отношений в русском литературном языке второй половины XVIII века. Изд. Казанского унив., 1972

Казанская (1972): Казанская Э. В., Замечания о суффиксальной синонимии в русском литературном языке XVIII века, Развитие синонимических отношений в русском литературном языке второй половины XVIII века. Изд. Казанского унив., 1972

Лопатин (1973): Лопатин В. В., Рождение слова. Наука, М., 1973

Мальцева (1966): Мальцева И. М., Из наблюдений над словообразованием в языке XVIII в., (на материале однокоренных параллелей -ость, -ство и -ость, -ие). Процессы формирования лексики русского литературного языка, (от Кантемира до Карамзина), Изд. Наука, М.;Л., 1966

Мальцева (1975): Мальцева И. М., Молотков А. И., Петрова З. М., Лексические новообразования в русском языке XVIII в., Л., Наука, 1975

Очерки-Измен. (1964): Изменения в словообразовании и формах существительного и прилагательного в русском литературном языке XIX века. Наука, М., 1964. Очерки по исторической грамматике русского литературного языка XIX века. под ред. В. В. Виноградова и Н. Ю. Шведовой

Суффиксальное (1974): Суффиксальное словообразование существительных в восточнославянских языках XV-XVII вв., Наука, М., 1974

Hüttl-Worth (1956): Hüttl-Worth G., Die Bereicherung des russischen Wortschatzes im XVIII. Jahrhundert, Wien, Verlag Adolf Holzhausens Nfg., 1956

Meillet (1965): Meillet A., LE SLAVE COMMUN. Seconde éd., PARIS, 1965

浦井康男(1976)：『普通名詞の特異性 ── 述語の場合 ──』，1976 年，ロシア語ロシア文学研究　第 8 号，pp. 34～47

浦井康男（1996)：『ロシア語データベースの作成とその運用 ── lemmatized concordance の場合 ──』，1996 年，ロシア語ロシア文学研究　第 28 号，pp. 93～107

浦井康男(1999)：『ラヂシチェフ『旅』におけるスラヴ／ロシア要素の使用について』，1999 年，ロシア語ロシア文学研究　第 31 号，pp. 70～81

浦井康男（2003)：『近代ロシア文章語の語彙発達について ── 現代語頻度辞書の観点から ──』，2003 年，スラヴ学論叢，第 6 号，1-22

エヴェリット(1980)：エヴェリット B. S.,『質的データの解析』, 新曜社, 残差分析 p. 49-50

齊藤（2005)：齊藤・中村・赤野，英語コーパス言語学，基礎と実践，改定新版，研究社，2005年